

事
瀬戸内体験学習
フィールドづくり
業

報 告 書

2005(平成 17)年 3 月

株式会社 中国 地域づくりセンター

目 次

【要約版】

【本 編】

1 . 事業の背景・目標	1
(1) 事業の目的	3
(2) 事業の背景	4
(3) モデル地域の現況	5
(4) モデル地域の動向	6
(5) 事業の目標	7
2 . 体験学習・修学旅行等の現況	9
2 - 1 体験学習実施状況	11
2 - 2 地域を訪れる修学旅行	24
3 . 先進事例地域の調査	29
3 - 1 高知県幡多地域	31
3 - 2 熊本県水俣芦北地域	36
3 - 3 その他の事例	41
4 . 体験学習推進のための課題	45
4 - 1 体験メニューについて	47
4 - 2 受け入れ体制について	48
4 - 3 情報発信について	49
5 . 体験学習推進のための方向性・施策	53
5 - 1 体験学習推進のための方向性	55
5 - 2 体験学習推進のための施策	58
6 . アクションプラン	69
7 . 資料編	77

【要約版】

国土交通省国土計画局地域連携支援ソフト事業 瀬戸内体験学習フィ・ルドづくり事業 【要約版】

(1) 事業の目的

瀬戸内海地域は、豊かな自然、数々の歴史、文化資源を有しており、文化、経済、観光など多分野に渡る広域交流を可能とするエリアである。体験学習等の素材にも恵まれており、域内の子ども向けの総合学習、グリーンツーリズムや修学旅行のフィールドとして、大きな可能性を持っている。

しかしながら、県境や市町村界の壁により、地域間相互の人や情報の交流が十分ではなく、一体的な取り組みが立ち後れている状況にある。

こうしたなかで本事業は、瀬戸内しまなみ大学、レンタサイクル事業など、県境や市町村界を越える取り組みを進めてきた瀬戸内しまなみ海道（西瀬戸自動車道）沿線をモデル地域として、体験学習の拡充や修学旅行誘致のための具体的施策を検討したものである。

(2) 事業の実施方法

事業の背景・目標

モデル地域である瀬戸内しまなみ海道沿線地域をとりまく状況を整理し、本事業でめざすべき目標を設定した。

体験学習・修学旅行等の現況

対象地域における主な体験学習の実施状況、他地域から訪れている修学旅行の状況等を調査した。

先進事例地域の調査

受け入れ組織を設置し、地域をあげて体験学習、修学旅行等の受け入れを進めている高知県幡多地域、熊本県水俣芦北地域における誘致活動の状況等を調査した。

体験学習推進のための課題

体験学習、修学旅行等の受け入れに向けて、対象地域が抱える課題を整理した。

体験学習推進のための方向性・施策

受け入れに向けて対象地域でめざすべき方向性 , 取り組むべき施策を , 「体験メニュー」「受け入れ体制」「情報発信」の三分野にわたり検討した。

アクションプラン

取り組むべき施策の中から , 来年度以降早急に着手すべきものを抽出した。

事業の推進体制

対象地域において体験学習を実施している関係者によるワーキンググループ会議を設けて検討を進めた。

第1回ワーキンググループ会議

日時 : 2004年11月26日(金)

開催地 : 今治市

第2回ワーキンググループ会議

日時 : 2004年12月3日(金)

開催地 : 因島市

第3回ワーキンググループ会議

日時 : 2004年12月20日(月)

開催地 : 宮窪町

第4回ワーキンググループ会議

日時 : 2005年1月28日(金)

開催地 : 尾道市

報告会拡大ワーキンググループ会議(報告会)

日時 : 2005年3月15日(火)

開催地 : 伯方町

(3) 検討内容

事業の背景・目標

【事業の背景】

近年、子どもを巡る深刻な問題が発生している。その解決に向けては、学校任せではなく地域としても、様々な活動の機会や場を提供していかねばならない。

観光客のニーズは、景観や歴史等の資源を「見る」スタイルから、地域の人々と交流する「体験」を重視する方向に向かっている。

学校の特色づくり・総合的な学習・体験的な学習という観点から、修学旅行の目的地や形態の多様化が進んでいる。

【モデル地域の現況】

対象地域の観光客数は、瀬戸内しまなみ海道の開通時（1999年度）には1,700万人に達したが、2002年度には1,000万人を割ってなおも減少傾向にある。

特色ある生涯学習プログラム「瀬戸内しまなみ大学」については、より一層の魅力づけが求められている。

「しまなみグリーンツーリズム」「潮流体験」など、全国にも誇れるような体験メニューが生まれ注目を集めている。

NPOなど民間団体が体験学習の実施主体やサポーターとなり、地域の交流や連携の担い手となることが望まれる。

【本事業の目標】

瀬戸内しまなみ海道沿線地域をモデル地域として、

体験学習など学びの場や機会をつくり、地域内の子どもたちの郷土に対する知識と誇りを育む。

体験学習による地域外からの誘客による交流の拡大、入り込み観光客の拡大をめざす。

体験学習・修学旅行等の現況

【体験学習実施状況】

様々な分野にわたる体験メニューが用意されている。実施主体も個人、住民団体、NPOなど多様である。

半年のみ、しかも土日祝日限定にもかかわらず3,000人以上受け入れている「潮流体験」、合わせて6,000人以上を受け入れている「しまなみグリーンツーリズム」など、集客力ある体験メニューが存在する。

【地域を訪れる修学旅行】

修学旅行客の多い広島市に近く、観光地としての知名度もある尾道市へ立ち寄る学校は多い。

同様に広島市を訪問し、「しまなみグリーンツーリズム」を体験する目的で訪れる学校がある。2002年度以降、100～200人の小中学校が数校ずつ訪れ、半日～1日滞在して体験メニューを楽しんでいる。

先進事例地域の調査

【高知県幡多地域】

幡多広域観光推進協議会（任意団体）が受け入れ窓口となり、四万十川流域（3市3町2村）への修学旅行誘致を進めている。

運営の財源は幡多広域市町村圏事務組合の負担金、高知県等からの補助金。

ホエールウォッチング、四万十川でのカヌー、カツオのたたきづくりが看板メニュー。

【熊本県水俣芦北地域】

水俣市および周辺3町を対象として、NPO法人である水俣教育旅行プランニングが誘致活動を推進。

運営の財源は旧JR水俣駅の管理委託費、教育旅行のコーディネート代金など。

水俣市には水俣病や環境行政を学びに来る学校が多く、環境にちなんだ体験メニューが多い。

行政からの委託事業でタクシー運転手、旅館従業員を対象とした研修事業を実施している。

【その他】

長野県飯田市では、同市および周辺の8町村を対象として、誘致活動を進める南信州観光公社が設立されている。市町村のほか、地元の商工会議所、金融機関、観光事業者等が出資している。

和歌山県では2002年より「ほんまもん体験」と銘打ち、体験型の観光誘致を進めている。登録されている体験メニューは286にもおよぶ。

体験学習推進のための課題

【体験メニューについて】

看板となるメニューを明確に

地域のイメージを形成する、やっぱり「しまなみ海道」と思えるような看板メニューが必要である。

地域の魅力を語り尽くす

水俣では21種類の家庭ゴミ分別「体験」が看板メニュー。このように磨けば光る資源、メニューはまだある。

地域内の連携、仲間さがしにはげむ

修学旅行ともなれば、体験メニュー関係者のみでの受け入れは難しい。活動や受け入れに対する地域の協力や理解が必要。

担い手は孤軍奮闘

同様の体験メニューを実施している関係者・団体間でも交流や連携の機会が少ない。

【受け入れ体制について】

窓口機能が必要

先進事例地域のような一元的な受け入れ業務ができる窓口機能が必要。

地域内の連絡・調整体制が不十分

団体間の連絡や調整，域内の観光事業者等との協力をとりもつ機能が求められる。

積極的な「営業」活動が必要

大都市圏の得意先まわり，体験後のフォローアップ，顧客の管理など，きめ細やかな営業活動が大切。

民間の力を活用

市町村合併や財政面の制約などがあり，行政に一方的に依存することはできない。民間団体の力が発揮できるような体制づくりが必要。

【情報発信について】

情報発信が不統一

「瀬戸内しまなみ海道」として統一した体験学習に関する情報収集・発信が必要。

地域内にも周知を

体験学習の内容や修学旅行誘致の実績が地域内にも知られていない。地域内へ知らしめていく必要がある。

情報発信に工夫を

「看板」メニューを明確にした出版物，相手に応じたきめ細やかで多様な情報発信が求められる。

体験学習推進のための方向性・施策

【めざすべき方向性】

体験メニューづくり

魅力ある体験メニュー開発～しまなみ海道を代表する特色あるメニューづくり
未活用資源の体験メニュー化～島の生活，歴史等に根ざしたメニューづくり

地域との連携～各メニュー，団体と地域との協力関係づくり

担い手づくりと支援～各メニュー，団体への資金，情報，技術的な支援

受け入れ体制づくり

受け入れ組織づくり～修学旅行等を一元的に受け入れるための組織づくり

対外窓口の一元化～地域内の状況を把握し，対外的な交渉ができる機能の整備

地域内における調整～地域内の連絡調整，役割分担等を果たす機能の整備

体験メニューの研鑽～各メニュー，団体への育成の機会，場の提供

誘致活動の推進～体験学習，修学旅行等の誘致に向けた諸活動の実施

情報発信

域内情報の収集，管理～体験学習を中心に旬な地域情報を常時収集

地域「外」への情報発信～効果的な媒体を使い，地域の魅力や体験メニューをPR

地域「内」への情報発信～地域住民向けの体験メニュー，修学旅行等の来訪状況をPR

きめ細やかな情報発信～地域，対象者別の情報発信，リピーターや顧客獲得のための情報発信

【取り組むべき施策】

体験メニューづくり

「海」のメニューづくり

「食（しまの暮らし）」のメニューづくり

「レンタサイクル」の付加価値づくり

島の生活「語り部」の募集，育成

博物館，美術館における体験メニューづくり

バス，タクシー事業者との連携

定期船事業者との連携

宿泊施設との連携

教育機関との連携

体験メニュー，団体への資金面での支援

体験学習の動向等の情報収集

体験メニューの魅力向上

受け入れ体制づくり

受け入れ設立組織準備会（仮称）の発足

地域内の関係団体への呼びかけ

地区別，分野別の受け入れ体制づくり

コーディネーターの募集

問い合わせ窓口の整備

予約取り次ぎ窓口の整備

連絡会議の開催

実施状況，予約状況等の把握

学習会の開催
先進地視察会の開催
地域内での合同体験会の開催
教育委員会，学校への営業
事前・事後学習の実施
フォローアップの実施
受け入れ組織による情報収集
特派員制度

情報発信

パンフレットの制作
ホームページの改訂
しまなみ大学通信への掲載
子ども向けの情報発信
CD，DVDの制作
出先事務所の活用
自治体広報誌への掲載
地域内メディアの活用
関係者への定期的な情報提供
近隣都市を対象とした情報発信
顧客への情報発信

アクションプラン

【体験メニューづくり】

「海」のメニューの検証- 新たなメニューの重点的な情報発信，利用者の感想等の収集に努める。
「食（しまのくらし）」のメニューの拡大・広島県側の実施団体の拡大をめざす。
橋梁工事の「語り部」さがし・橋梁や西瀬戸自動車道についての「語り部」さがしのための情報収集を行う。
博物館，美術館における体験メニューの発掘・体験メニューの情報収集，担当者との意見交換を行う。
教育機関と連携した体験メニューの発掘・地域向け体験講座の情報収集，関係者との意見交換を行う。
交通事業者との連携・体験学習や修学旅行の実施状況等を紹介し，協力を要請する。
宿泊施設との連携・体験学習や修学旅行の実施状況等を紹介し，協力を要請する。

【受け入れ体制づくり】

受け入れ設立組織準備会（仮称）の発足・準備会（仮称）を発足させ，受け入れ体制づくりに向けた具体的な検討を進める。
先進地視察会の開催・準備会（仮称）のメンバー等に呼びかけ，先進事例地域などへの視察を行う。
地域内での合同体験会の開催・瀬戸内しまなみ海道の全通記念イベント等における合同体験会を開催する。

【情報発信】

パンフレットの配布・新規パンフレットを積極的に配布する。

ホームページの改訂・ホームページ上の情報も，パンフレットにあわせて改訂する。

しまなみ大学通信への掲載・誌面に体験学習コーナーを設ける。

出先事務所の活用・自治体の出先事務所を情報発信拠点として活用する。

自治体広報誌への掲載・体験メニューの情報や修学旅行の受け入れ情報などを掲載する。

地域内メディアの活用・地域内のケーブルテレビ局に情報提供する。

関係者への定期的な情報提供・修学旅行や体験メニューの実施状況などを，体験メニューの実施団体，行政担当者などに情報提供する。

近隣都市を対象とした情報発信・近接する都市圏の住民を対象に，季節別のチラシ等を制作する。

1 . 事業の背景・目標

1. 事業の背景・目標

(1) 事業の目的

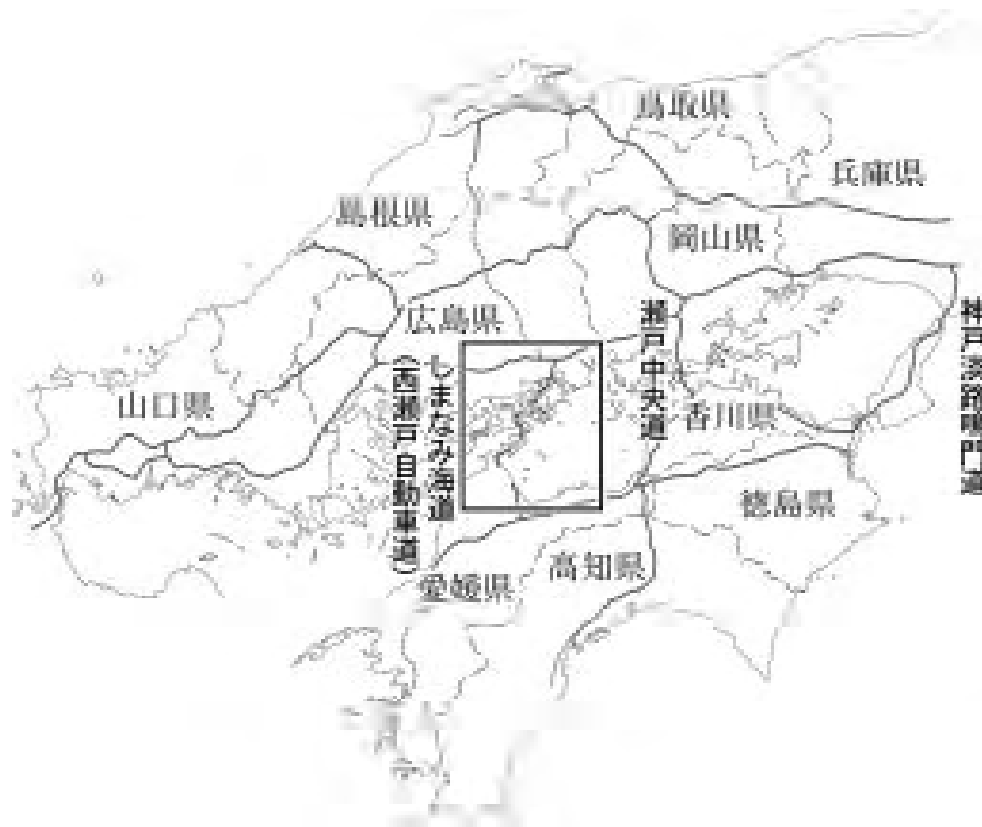
瀬戸内海地域は、豊かな自然、数々の歴史、文化資源を有しており、文化、経済、観光など多分野に渡る広域交流を可能とするエリアである。体験学習等の素材にも恵まれており、域内の子ども向けの総合学習、グリーンツーリズムや修学旅行のフィールドとして、大きな可能性を持っている。

しかしながら、県境や市町村界の壁により、地域間相互の人や情報の交流が十分ではなく、一体的な取り組みが立ち後れている状況にある。

こうしたなかで本事業は、瀬戸内しまなみ大学、レンタサイクル事業など、県境や市町村界を越える取り組みを進めてきた瀬戸内しまなみ海道（西瀬戸自動車道）沿線をモデル地域として、体験学習の拡充や修学旅行誘致のための具体的施策を検討したものである。

本事業により、瀬戸内海をはさんだ地域間交流が一層活発になり、地域の連帯感、一体感が醸成され、新たな地域の営みの創出を図ることを期待する。

図 1-1 モデル地域「瀬戸内しまなみ海道沿線地域」の位置



(2) 事業の背景

地域における子育て環境づくりの必要性

子どもたちを巡る昨今の状況は、いじめ、不登校、引きこもり、少年犯罪の凶悪化や増加など、様々な問題が発生し、深刻な社会問題となっている。

このような問題を解消するには、学校教育だけではなく、豊富な生活体験、自然体験などを経験させ、子どもたちに豊かな心やたくましさなどの「生きる力」をはぐくんでいく必要がある。

そのためには、子どもたちがのびのびと遊べる場づくりや様々な人々との多様な交流活動や親子で参加できる様々な活動の機会や場を提供していかなばならない。

体験型観光への期待

農山漁村地域を訪問する観光客等が、農林漁業や文化・伝統工芸、アウトドア等の体験を通じて、地域の人々と交流する「体験」型観光が増大している。

これは、従来までの景観や歴史等の資源を「見る」だけという従来の観光に代わり、訪れた地域ごとに十分な時間をとり、その地域の魅力を奥まで堪能するというように旅行者のニーズが変化してきたことと、受け入れ側となる各地域にとっても交流人口の増加等を通じた地域や産業の活性化への期待の高まりが相乗効果を生むことによるものと考えられる。

修学旅行の多様化

学校の特色づくり・総合的な学習・体験的な学習という観点から、修学旅行の目的地や形態の多様化が進んでおり、訪問先の地域の人々との対話や交流、その地域ならではの「体験」学習を重要視する学校が増えている。

このことは、これまでの観光資源や受け入れ体制に頼った地域だけではなく、これまで修学旅行を迎えていない地域であっても、個性とソフトが整えば受け皿となりうることを示している。

(3) モデル地域の現況

入り込み観光客数の減少

本事業のモデルである瀬戸内しまなみ海道周辺地域の総観光客数^{*}は、1990年台は800万人前後であったが、1999年にはしまなみ海道開通(5月)により倍増の1,700万人に達した。

しかし、開通効果の消失や通行料の割高感があつてか、翌2000年には1,100万人に落ち、2002年には1,000万人を割ってなおも減少傾向にある。

各地では開通効果をねらった観光施設や商業施設が設けられたが、既に閉鎖された施設や経営が危惧されている施設も少なくない。経済面等で地域社会に与える影響も大きい。

しまなみ大学の新たな展開への期待

「瀬戸内しまなみ大学」は、地域全体をキャンパスに見立てて、多様な個性を生かした学部・学科を設定し、「体験・学ぶ」イベントを継続的に展開するとともに、質の高いプログラム内容を展開することにより、周辺地域住民どうしの交流の促進、地域外からの誘客を図り、地域間の交流、地域文化の創造、新たな地域づくり活動の推進等をもって、地域の活性化をめざそうとするものである。

しまなみ海道開通にあわせて1999年3月に開講し、初年度の学生(登録参加者)800人台から、2004年度には2,000人を越えるなどの発展はあるものの、まだまだ地域の活性化という目標からは、新たな展開が期待される段階である。

とくに、既存の地域イベントや生涯学習講座に冠名を着けただけの講座が少なくなく、訴求力のある独自講座等が求められているところである。

体験型観光の芽生え

全国的に体験型観光へのニーズが高まるなか、対象地域においても魅力ある体験メニューが生み出されている。

農山漁村の主婦たちがもてなし役となる「しまなみグリーンツーリズム」(今治市, 上島町), 「潮流体験」(今治市宮窪町)などは、他地域には見られない個性と魅力あるメニューで、すでに修学旅行等の受け入れ

^{*} 瀬戸内しまなみ海道周辺地域振興協議会を構成する21市町村(2004年3月現在)の入り込み観光客数の合計

実績を重ねている。

NPO等民間活動の盛り上がり

対象地域においてもNPO（特定非営利活動法人）に象徴される民間団体等による熱心な活動が進められている。

1998年のNPO法（特定非営利活動促進法）施行以降、認証を受けた域内のNPOは、広島県側17団体、愛媛県側18団体にのぼる（2005年2月末現在）。

こうしたNPOなど民間団体が体験学習の実施主体やサポーターとなり、地域の交流や連携の担い手となることを望みたい。

（４）モデル地域の動向

しまなみ海道の全通

瀬戸内しまなみ海道は七つの橋で結ばれているが、事業中の生口島道路（因島市、瀬戸田町）、大島道路（今治市宮窪町、同吉海町）の開通により、2005年度内には全線開通する予定である。

1999年の（部分）開通以来、ふたたび内外の注目を集めるほか、時間距離の短縮により誘客や地域内相互の交流の活発化が期待される。沿線地域のさらなる発展の機会であり、この節目を有効に活用したい。

市町村合併の進展

瀬戸内しまなみ海道周辺地域振興協議会は、1994年に20市町村によって発足し、2001年に御調町が加入し、21市町村で構成される。

これらがいわゆる「平成の大合併」により、愛媛県側では上島町（2004年10月：弓削町・生名村・岩城村・魚島村）、今治市（2005年1月：今治市、朝倉村、玉川町、波方町、大西町、菊間町、吉海町、宮窪町、伯方町、上浦町、大三島町、関前村）の1市1町となった。また、広島県側も尾道市に向島町、御調町が編入（2005年3月）し、さらに因島市、瀬戸田町が編入（2006年1月）する予定である。

すなわち2006年1月には21市町村から2市1町となるわけである。このような枠組みの変化にともない、市町村の境界がなくなり、地域が一体となった発展が期待される一方で、協議会や市町村が実施してきた事業の変更、また民間団体への支援措置等への影響が懸念されている。

(5) 事業の目標

以上、これまで述べてきた事業の背景、モデル地域の現況・動向を受けて、本事業は「瀬戸内地域における体験学習のフィールドづくり」を目的として、瀬戸内しまなみ海道周辺地域をモデルケースとして、次の目標を達成するための方策を検討する。

図 1-2 本事業の目標

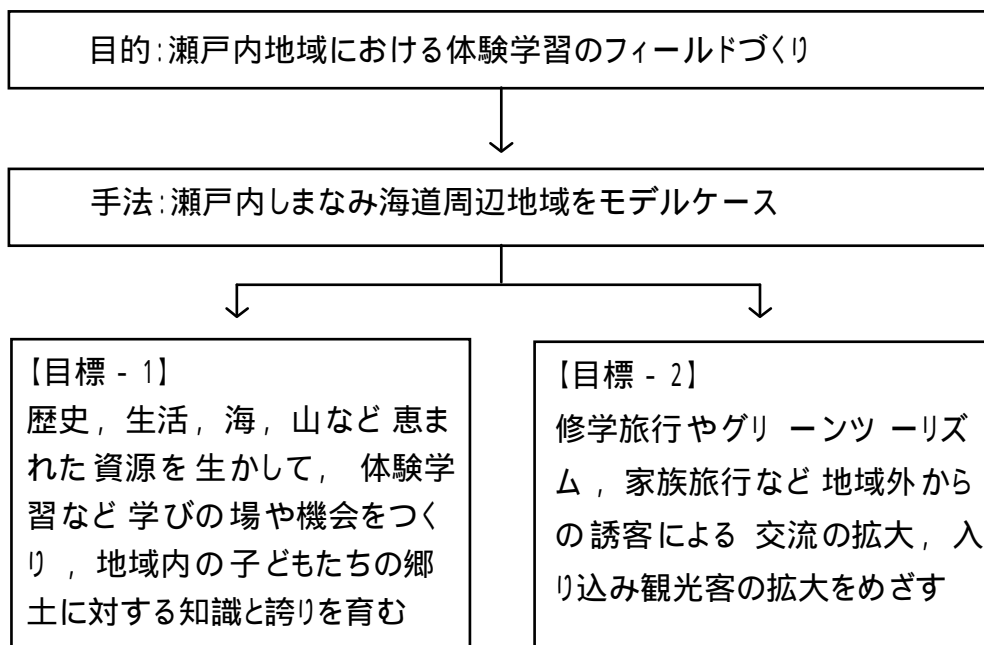


図 1-3 モデル地域「瀬戸内しまなみ海道沿線地域」の構成市町
 (瀬戸内しまなみ海道周辺地域振興協議会構成市町 2005年2月末現在)



2 . 体験学習・修学旅行等の現況

2 . 体験学習・修学旅行等の現況

2 . 1 体験学習実施状況

瀬戸内しまなみ海道周辺地域で取り組まれている体験学習の内容等を、実施団体よりヒアリング調査した。

(1) 尾道七佛めぐり

実施場所

尾道市山手地区の7ヶ寺
持光寺，天寧寺，千光寺，大山寺，西國寺，浄土寺，海龍寺

内 容

販売している朱印帳に，各寺の朱印を集めると「満願成就」の印と紙掛け軸をプレゼント。

運営者

尾道七佛めぐり事務局（西國寺，持光寺）

実施時期・日

随時

料金・費用

朱印帳 300 円，朱印料各 300 円

受け入れ実績，客層

2年半で朱印帳を15,000部販売，夫婦やグループで1冊持ってまわる例が多いので，実際の利用者はこの数字より多い。

客層としては中高年が多い。

宣伝方法

チラシ，ホームページ

(2) にぎり仏づくり

実施場所

持光寺（尾道市西土堂町）

内 容

一塊りの土を願いを込めて手のひらで握り、世界で一つの仏をつくる。
後日、窯で焼き郵送する。

運営者

住職，副住職

実施時期・日

随時

料金・費用

大人 1,500 円，小人 1,200 円，送料 240 円

受け入れ実績，客層

年間 3～4 千人，修学旅行の受け入れ実績有り，小学校への出張講座も実施（講話付き）。若年層が大半，リピーターも多い。

宣伝方法

観光雑誌等掲載

課題・今後の抱負など

にぎり仏づくりや講話を通して，子どもたちに命の大切さを伝えていきたい。

図 2-1-1 にぎり仏（尾道市 / 持光寺）



(3) 文化財，郷土史学習

実施場所

尾道市内の小学校等

内 容

文化財発掘体験（小学校校庭などで測量，発掘，接合までシミュレーション），古墳の測量・図面作成，火起こし体験，古代食体験（ひえ・あわ栽培から石臼での製粉まで）等

運営者

(NPO)尾道文化財研究所

実施時期・日

随時（学校側との調整）

料金・費用

学校からは指導者の「日当」のみ支給されるが，物品購入など最低限の経費にしかない。

課題・今後の抱負など

現在，学校現場も市町村合併で混乱しており，新しい取り組みを受け入れにくくなっている。

(4) いんのしま・まるごと自然観察会

実施場所

因島市内各地，島外・県外への遠征も有り

内 容

月 1 回，因島を中心とした地域で自然観察会を開催。毎回の活動報告や次回案内を会報で郵送。

運営者

駄賀恒男（因島市重井在住）

実施時期・日

月 1 回，休祝日に開催

料金・費用

年会費 2,000 円（ 1 人ないし 1 家族）

非会員は 1 回あたり 1 人 200 円ないし 1 家族 300 円

受け入れ実績，客層

2001 年 3 月より開催，毎回 10 人前後が参加（最高は 36 人），会員は 9 家族，29 人。中高年が多い。

宣伝方法

市や公民館の広報誌

課題・今後の抱負など

しまなみ海道としては「海辺の生き物」を取り上げたい／子どもの参加を増やしたい／公民館や学校と連携して「ゴミ問題」を扱いたい。

図 2-1-2 いんのしま・まるごと自然観察会（因島市 / 鏡浦地区）



(5) 村上水軍の「小早船体験」

実施場所

因島市大浜町しまなみビーチ

内 容

村上水軍が合戦の際に使った小早船(こはやぶね)。毎年、8月末には市民による小早レースが行われるが、しまなみビーチの海水浴シーズンには、この小早漕ぎを体験することができる。

運営者

小早レース出場チーム、因島市しまおこし課

実施時期・日

7月、8月の日曜日 12～14:00

料金・費用

無料

受け入れ実績、客層

子どもや家族連れが中心。青年会議所の全国大会の際は、100人前後の体験者を一日かけて練習させて、手助けなしにレースが行える程度まで習得させた。

宣伝方法

市の広報誌、しまなみビーチでのアナウンス

課題・今後の抱負など

体験する機会を増やしたいという思いはある。小早レース出場チームがローテーションを組み、練習の合間に海水浴客を乗せはじめたもの。修学旅行等への対応はかなり以前から調整が必要。天候の影響を受けやすい点も難。

図 2-1-3 小早船体験(因島市/しまなみビーチ)



写真提供：因島市しまおこし課

(6)しまなみグリーンツーリズム(全般)

実施場所

今治市島しょ部(旧上浦町,大三島町,伯方町,吉海町,宮窪町)
上島町

内 容

農漁村の婦人グループ等が担い手となり,ふるさとの味,農作業,生活技術,アウトドアなど68種類の体験メニューでもてなす。

運営者

グリーンツーリズム推進協議会(事務局:今治中央地域農業改良普及センターしまなみ普及室)

実施時期・日

随時

料金・費用

協議会運営は構成町村の負担金で運営。

体験メニューは各実施主体が料金徴収。

受け入れ実績,客層

2001年度459人,02年度5,496人,03年度は計6,182人を受け入れ。
管内各地で分散させ修学旅行の受け入れ実績あり。

宣伝方法

農業改良普及センター発行「グリーンツーリズムマップ」,同ホームページ

課題・今後の抱負など

農業改良普及センターでは,その職務からバスや旅館の手配ができな
いため,交通,宿泊等との一体的なサービス窓口の設置が必要。

学校との連携による「食育」の推進,管内14カ所の直売所との連携に
よる農産物の情報発信を進めたい。

(7) たこ・五目・釜めしづくり

実施場所

今治市伯方町有津（JA支所，会員の自宅など）

内 容

調理体験および試食（2～3時間）

運営者

有津婦人同志会

実施時期・日

随時（一週間までに要予約）

料金・費用

1,000円（タコめしづくり）

大人数であれば指導者日当3,000円/人，プラス材料費で計算

受け入れ実績，客層

平均すると月1回以上受け入れている。修学旅行も毎年受け入れている。客層は修学旅行生，家族，婦人グループなど幅広い

宣伝方法

農業改良普及センター発行「グリーンツーリズムマップ」，同ホームページ，旅行雑誌

課題・今後の抱負など

農家民宿を設けて島にじっくりと滞在してもらいたい。30年近く続けてきた会の高齢化が課題。これまで修学旅行等では町役場が応援してくれたが，合併後にどうなるか心配。

図 2-1-4 タコめしづくり（今治市伯方町/有津JA支所）



写真提供：今治中央地域農業改良普及センター

(8) レモン懐石づくり

実施場所

上島町岩城（加工場，会員の自宅）

内 容

特産品の青いレモンを使ったオリジナル料理「レモン懐石」を，参加者と生活研究グループの主婦と一緒に調理し味合う。同料理は 1998 年度新食生活コンクールで農林水産省食品流通局長賞を受賞。

運営者

岩城村生活研究グループ

実施時期・日

夏季をのぞく，要予約（半月前）

料金・費用

2～3,000 円 / 人

受け入れ実績，客層

農作業体験，レモン製品加工体験などもふくめて，2003 年度は 178 人を受け入れ。客層は子どもから中高年まで幅広い

宣伝方法

農業改良普及センター発行「グリーンツーリズムマップ」，同ホームページ，旅行雑誌

課題・今後の抱負など

レモン農家による研究会を立ち上げ，体験型農家民宿をめざしている。

図 2-1-5 レモン懐石づくり（上島町岩城）



写真提供：今治中央地域農業改良普及センター

(9) 大三島少年自然の家

実施場所

大三島少年自然の家（ミロアール・ヴィラージュ）
今治市大三島町

内 容

大三島少年自然の家は、愛媛県内の小中学校の課外活動の拠点である。2003年度には4～10月の半年間で、小学校92校、中学校21校を受け入れている。アウトドア等のプログラムは学校側が実施するが、カヌー等は施設職員が指導員を務める。

運営者

職員（大三島B & G海洋センターで研修）

実施時期・日

通年。ただし、4～10月の平日は小中学校で予約がいっぱい。

料金・費用

小中学生 1,200円（1泊2日）、三食合計1,100円
一般（高校生以上）3,400円（1泊2日）、三食合計1,450円

受け入れ実績、客層

2003年度には4～10月の半年間で、小学校92校/6,255人、中学校21校/1,442人、一般利用をあわせると10,204人。
学校以外には大学や企業の研修利用もある。

宣伝方法

パンフレット、旅行雑誌、ホームページ
オフシーズンに企業研修等を誘致し、利用の拡大を図りたい。

(10) 潮流体験

実施場所

宮窪漁港発着～能島沖へ

内 容

国指定史跡の「能島」周辺を周り、日本有数の潮流を間近で体験させる。ボランティアのガイドが同乗し、観光歴史について説明する。

運営者

宮窪町観光協会，郷土史研究家

実施時期・日

5月～10月のうち土・日・祝祭日（平日は事前予約で対応）

料金・費用

大人500円，子供250円（平日の予約は別途）

受け入れ実績，客層

3,000人以上（2003年度）
子どもから高齢者まで幅広い。修学旅行にも対応している。

宣伝方法

パンフレット，旅行雑誌，ホームページ

課題・今後の抱負など

1回の乗船は20人・20分間，団体客の場合は村上水軍博物館等とのローテーションが必要。（NPO）能島の里を発展させる会を発足させ，村上水軍博物館，カレイ山展望公園，石文化伝承館などと連携した周遊型の観光地づくりをめざしている。

図 2-1-6 潮流体験（今治市宮窪町 / 能島沖）



写真提供：宮窪町観光協会

(11) いまばり夢学校

実施場所

今治市および上島町各地

内 容

地域のNPO等より講座を公募し、参加者(子どもたち)が「開校式」の場で選考しカリキュラムを決定する。2003年度は36人の参加者に「開校式」「卒業式」をふくめ9回の講座を実施した。

運営者

(NPO)今治NPOサポートセンターおよび各講座の実施団体(NPO, ボランティア等)

実施時期・日

2003年7月～2004年2月に9回の講座,それ以前には外部スタッフの学習会を開催。

料金・費用

参加費無料。運営費用は助成金,協賛金を活用。

受け入れ実績,客層

2003年度は参加者36人,講座応募16件,うち採用は8件。

講座と参加者は今治市および上島町にて公募する。スタッフには高校生ボランティアも採用する。

宣伝方法

今治市および越智郡の小学校にてチラシ配布。

課題・今後の抱負など

フィールドを「しまなみ海道」へ広げることも可能。

(12) 瓦粘土体験実習

実施場所

かわら館「実習館」(今治市菊間町浜)

内 容

瓦粘土を使って手形，造形，絵付けなどを体験，作品は約1ヶ月後に郵送。瓦職人の話を聞く例もある。

運営者

かわら館

実施時期・日

開館日には常時実施(受付は9～15:00)

料金・費用

1個につき粘土代100円，焼成代200円
実習台使用料200円/台(6人まで可)

受け入れ実績，客層

2003年度2,924(粘土使用数)，かわら館入館者は7,981人。入館者数は減少傾向であるが，体験実習の利用は開館以降3倍。

家族やグループ客が多い，2003年度は小学校16校，幼稚園7園を受け入れ。

宣伝方法

観光雑誌等掲載，県内観光施設，ホテル等でパンフレット配布，近隣の小学校等へ案内状を発送。

課題・今後の抱負など

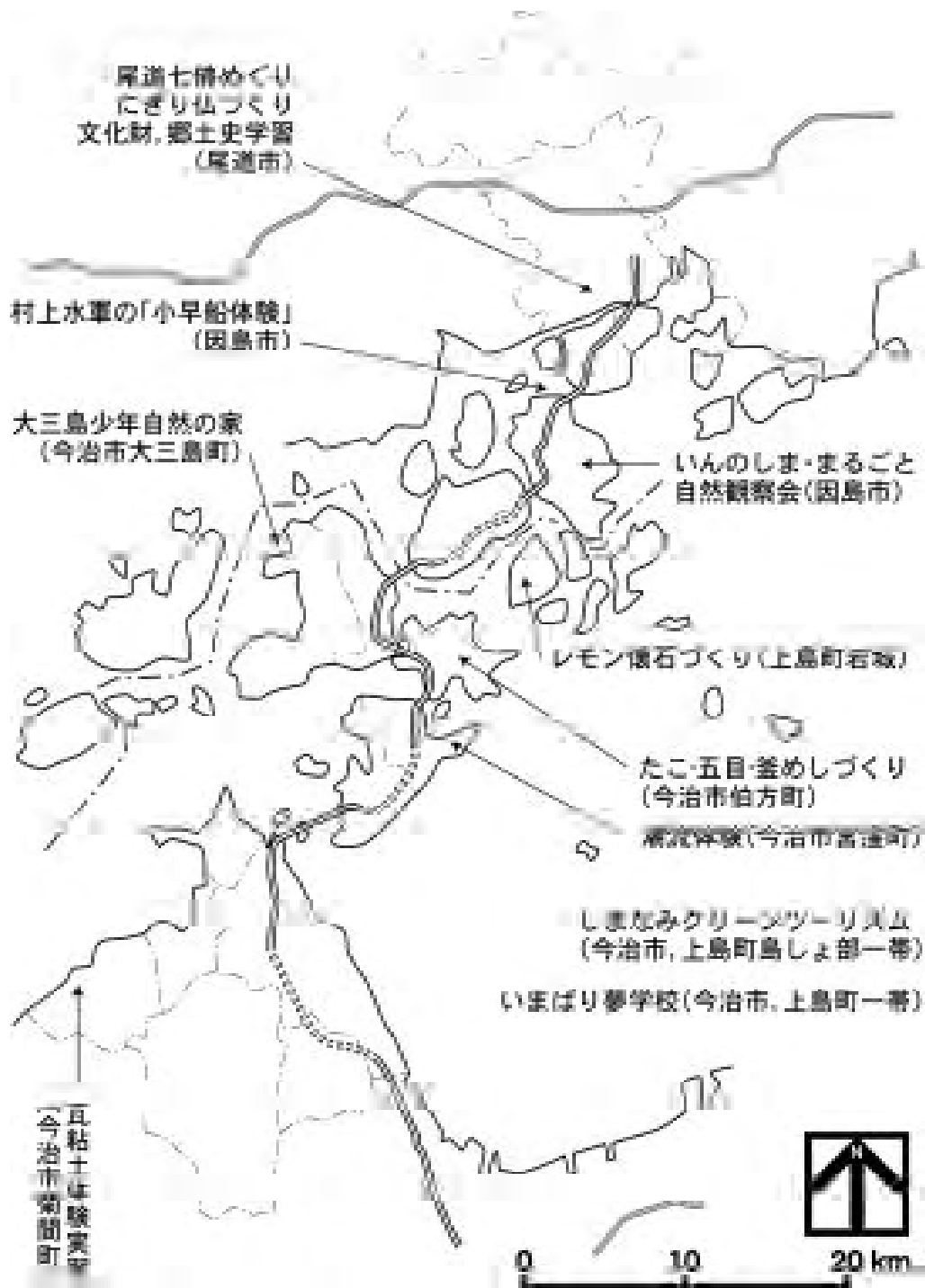
町の鬼瓦巡り，工場見学などを実施し，町の特産品としてのPRを進めたい(現段階では夢)。

図2-1-7 瓦粘土体験実習(今治市菊間町/かわら館)



写真提供：かわら館

図 2-1-8 体験学習（ヒアリング先）実施場所



2・2 地域を訪れる修学旅行

市町村からの情報提供等により、しまなみ海道周辺地域を訪れる修学旅行の行程等を把握した。

(1) 尾道市への立ち寄り

観光地として知られ、修学旅行受け入れの多い広島市に近いことから、尾道市を訪れる学校は多い。

市内では少人数のグループに分かれて、文学のこみち、古寺めぐりコースをたどったり、レンタサイクルで周遊している光景を見ることができ

栄光学園（神奈川県）

時 期：3月下旬 行 程：3泊4日

立寄先：文学のこみち散策

宿 泊：尾道市，宮島町

蒲郡東高校（愛知県）

時 期：5月下旬～6月上旬 行 程：2泊3日

立寄先：千光寺公園，浄土寺

宿 泊：宮島町

宮代高校（埼玉県）

時 期：10月下旬 行 程：3泊4日

立寄先：招き猫美術館，商店街

宿 泊：広島市

(2) しまなみ体験メニューの利用

グリーンツーリズム推進協議会（事務局：今治中央地域農業改良普及センターしまなみ普及室）が推進する体験メニューを目的に訪れる学校が増えている。

これまでは、数時間～半日程度の滞在がほとんどであったが、2004年6月に訪れた高鷲南中学校（大阪府羽曳野市／生徒174人／引率14人）は、まる一日滞在しクラスごとに二つのメニューを体験し、地域内に宿泊している。

深川第四中学校（東京都）

市町村：今治市吉海町，宮窪町，伯方町，上浦町，大三島町，
上島町岩城，弓削，生名

時 期：5月中旬 行 程：2泊3日

立寄先：今治港よりフェリー乗船，グループに分かれて各地でグリーンツーリズムを体験。

レンタサイクル

みかん狩り，郷土料理づくり（生名），漁業関係者へのインタビュー，海藻押し葉体験（弓削），イチゴ狩り，ジャムづくり，餅つき（上浦町），太刀魚調理体験，炭焼き体験（伯方町）

宿 泊：今治市，広島市

湘南学園中学校（神奈川県）

市町村：今治市大三島町，伯方町，宮窪町など

時 期：11月上旬 行 程：4泊5日

立寄先：郷土料理体験，ミカン狩り

宿 泊：広島市

表 2-2-1 高鷲南中学校（大阪府）修学旅行行程（2004年6月2～4日）

クラス	1組	2組	3組	4組	5組
生徒/引率者数	35/3	37/2	34/3	33/3	35/3
1日目	6:30 学校出発 バス～12:00 広島お好み村(昼食) 12:50 平和公園 写真，聞き取り 15:00 平和資料館見学 17:30 ホテル着 グリーンピア安浦（広島県豊田郡安浦町）				
2日目午前	A:いちご狩り B:ジャム作り （上浦町）	地引き網 （宮窪町）	サイクリング （多々羅しま なみ公園，上 浦町）	向島マリン ユースセン ター （向島町）	いちご狩り （上浦町）
午後	向島マリン ユースセン ター （向島町）	潮流体験 （宮窪町）	潮流体験 イチゴ狩り （宮窪町）	A:いちご狩り B:ジャム作り （大三島町）	向島マリン ユースセン ター （向島町）
宿泊	民宿うずしお （伯方町）	国民宿舎いん のしまロッジ （因島市）	旅館富士見園 （上浦町）	ふるさと憩い の家（大三島 町）	大島シーサイ ドホテル（吉 海町）
3日目	8:30 バス出発 11:50 姫路セントラルパーク 昼食 15:30 バス出発 17:30 学校到着・解散				

資料提供：今治中央地域農業改良普及センターしまなみ普及室

（3）その他の訪問例

実数は少ないが，他の地域でも首都圏や近畿圏からの修学旅行の受け入れ実績がある。

京都市立醒泉小学校

市町村：因島市

時 期：5月中旬 行 程：1泊2日
立寄先：地元の子ども水軍太鼓と演奏で交流
 フラワーセンター見学
宿 泊：国民宿舎いんのしまロッジ

明星学園中学校（東京都）
市町村：瀬戸田町
時 期：7月上旬 行 程：4泊5日
立寄先：サンセットビーチ
宿 泊：瀬戸田で1泊

日本女子大附属高校（神奈川県）
市町村：今治市菊間町
時 期：5月中旬 行 程：4泊5日
立寄先：かわら館，レリーフ製作
宿 泊：松山市

遠隔地からの修学旅行のほかにも，広島，愛媛県内の小中学校が当該地域を訪れ，各種の「体験」を図る例が見られる。

安芸津中学校（広島県安芸津町）
市町村：瀬戸田町
時 期：6月上旬 行 程：1泊2日
立寄先：中野集落，会社・商店研修
宿 泊：瀬戸田ユースホテル

安芸津中学校（広島県安芸津町）
市町村：今治市上浦町
時 期：6月下旬 行 程：1泊2日
立寄先：レンタサイクル，多々羅大橋，ひらめ養殖の学習
宿 泊：上浦町しまなみふれあい交流館

盈進中学校（広島県福山市）
市町村：今治市菊間町 時 期：8月上旬
行 程：2泊3日
立寄先：かわら館，レリーフ製作

宿 泊：不明

生名小学校（上島町生名）

市町村：今治市玉川町 時 期：8月上旬

行 程：1日

立寄先：オリエンテーリング，マスの塩焼き体験

美川村連合小学校（愛媛県美川村）

市町村：上島町岩城

時 期：7月中旬 行 程：1泊2日

立寄先：積善山展望台，岩城郷土館，地引き網

宿 泊：岩城島開発総合センター

3 . 先進事例地域の調査

3 . 先進事例地域の調査

地域をあげての受け入れ組織を設けて、体験学習や修学旅行の誘致をめざした積極的な活動を進めている高知県幡多地域、熊本県水俣地域を対象として、先進事例地域の調査を行った。

3 . 1 高知県幡多地域

(1) 地域の概要

幡多地域は高知県西南部に位置し、3市3町2村（中村市、宿毛市、土佐清水市、佐賀町、大方町、大月町、西土佐村、三原村）より構成される。

四国山地から延びた山なみが海岸部に迫った比較的急峻な地形であり、総面積の8割以上を林野が占めるが、足摺岬、竜串海岸など素晴らしい景観を有する足摺宇和海国立公園、日本最後の清流と言われている四万十川、水深があり閉口性の良港の宿毛湾など豊かな自然資源が残されている。

(2) 受け入れ組織の概要

受け入れ組織の概要

名称「幡多広域観光推進連絡協議会」(任意協議会)

構成団体：中村市、宿毛市、土佐清水市、佐賀町、大方町、大月町、西土佐村、三原村、中村市観光協会、宿毛市観光協会、土佐清水市観光協会、佐賀町観光協会、大方町観光協会、大月町観光協会、西土佐村観光協会

所在地：高知県中村市駅前町6-16

連絡先：TEL 0880-31-0233 FAX 0880-31-0660

e-mail:koikikan@mb.gallery.ne.jp

http://www.gallery.ne.jp/~koikikan/

発足年：1995年（高知西南修学旅行等誘致推進協議会）

組織運営の財源

幡多広域市町村圏事務組合の負担金と、高知県もしくは(財)高知県観光コンベンション協会からの補助金・助成金。

(3) おもな活動内容

観光と新教育課程に使える学習・活動メニューの開発

新しい体験観光プログラムメニューの開発
幡多地域の観光総合窓口としての案内誘致業務
一般旅行・修学旅行・学校や企業のクラブ合宿・サークル
活動の誘致
地域リーダーの養成研修会の開催と体制づくり

(4) 誘致活動等の経緯

組織発足の経緯

協議会発足以前はは足摺岬や四万十川，土佐湾でのクジラやイルカ観光等の誘致を，各市町村が単独で実施していた。

1990年代前半から修学旅行が訪れるようになり，各市町村が連携し広域的な観光誘致を進める必要に迫られ，1994年に幡多広域市町村圏事務組合において観光誘致組織づくりを検討し，1995年8月に高知西南修学旅行等誘致推進協議会を発足した。

1995年から1998年までの3カ年は，高知県観光振興課から補助金と幡多広域市町村圏事務組合からの負担金，そして関係業者からの協力金で，また1998年からは幡多広域観光推進連絡協議会に名称を改め，高知県情報企画課からの補助金，幡多広域市町村圏事務組合の負担金と関係業者からの協力金で運営してきた。

しかしながら，関係業者も景気が低迷するなか，修学旅行だけではなかなか協力金も求めることが難しく，組織全体の再編を行うこととなった。

2001年度から現在においては，官主導型の組織編成で，財源については，広域圏事務組合の負担金と，高知県もしくは(財)高知県観光コンベンション協会からの補助金・助成金で運営を行っている。

受け入れ実績

当地を訪れる修学旅行は年々増加する傾向にあり，2000年度には2,500名を超えるようになった。この数字は誘致の努力だけでなく学校が求める修学旅行の目的が，「平和学習」や「スキー学習」から「自然環境」を体験できることを前提とした環境学習型に変化しつつあると考えられる。また，幡多地域が関西からの修学旅行にとって距離的なハンディキャップがあるものの，フェリーを宿泊をかねた移動手段として利用できたことも有利にはたらいた。

しかし，近年全国各地で修学旅行誘致に取り組む自治体なども増加し，幡多地域にとってもここ2～3年は横ばい状態が続いている。

(5) 活動のキーポイント

看板メニューを明確に

山、川、海の自然や農、漁業など地域資源を生かしたメニューによって修学旅行誘致をめざしている。メニューの3本柱として、ホエールウォッチング・四万十川カヌー・かつおのたたきづくり。このメニューは、全学校が選択している。看板となるメニューを鮮明に打ち出さなければ宣伝効果が薄くなる。

長期的な準備とフォローアップ

誘致活動には多大な費用と日数がかかる。しかも、誘致活動の成果が表れるのは早くも2年、遅いときには4年後となる。また、旅行から帰られた学校へのヒアリングや旅行代理店への訪問を行い、実施後の反省点等をまとめ各市町村や受け入れ施設への報告を行っている。

地域への周知

地域全体で受け入れるという雰囲気づくりが大切である。修学旅行だけでなく、メニューを地元の子供たちに体験させる場を設け、地域内への周知や共感を得る機会としている。

(6) 今後の展望や課題

旅行会社担当者からは、精算業務が煩雑になるため予約や支払いを一つの窓口で済ませることができるような体制づくりを要望されている（長野県飯田市では、「南信州観光公社」を設立し、体験メニュー、飲食、宿泊を一括管理している）。

受け入れ体制を強化するためには、事務局の運転資金や人材もネックになる。事務局にも収入（マージン）が入るようにしなければ、運営できない。

修学旅行は思い出づくり。短期的な損得ではビジネスにならないが、将来リピーターとして来てもらえる人を増やしていくことを目標とした。

(7) 瀬戸内しまなみ海道周辺地域へのアドバイス

メニューがたくさんある。今後、修学旅行の誘致するにあたって、内容や費用等の調整をするために横の連絡が必要になってくる。

学校は安く、より体験をしたい。この地域では橋の通行料がネックとなっているようだが、北海道や沖縄県などはバ

スチャーターへ補助金をだしているところもある。
しまなみ海道と幡多地域，あるいは四国全域との連携も今
後考えられるのでは？

図 3-1-1 高知県幡多地域の「看板」体験メニュー
四万十川のカヌー，カツオたたきづくり，ホエールウォッチング



幡多広域観光推進連絡協議会ホームページより引用

表 3-1-1 おもな体験メニュー ～高知県幡多地域

体験メニュー	実施場所 連絡先	内 容
ホエール ウォッチング	大方漁港	「クジラに会える町大方町」は、最後の清流と呼ばれている「四万十川」の河口に近く、ニタリクジラの生息が毎年確認されています。特に4月から7月にかけては比較的近い海域で確認される事が多い。
カヌー	西土佐村 カヌー館	全国のカヌー愛好家が集まる西土佐村カヌー館。大自然とのふれあいがいっぱいです。80艇のカヌーを完備、親切なインストラクター付での教室や、ツーリングが楽しめます。資料室などの各施設もご利用できます。
カツオたたき づくり	ネスト・ウ エストガー デン土佐	大方町入野松原で海を見ながらカツオのたたきづくり体験。昼食との組み合わせはもちろん、夕食との組み合わせもできます。
ビーチコーミ ング	砂浜美術館	広い砂浜を「美術館」と考えると、いろいろ想像力がわいてきます。砂浜に打ち上がった漂流物を拾い集め、観察したり、工夫をして楽しめます。
四万十川竹筏 下り体験	西土佐村 カヌー館	山から竹を切り出すことから始まるイカダづくり。みんなで力を合わせて組み上げよう！でき上がったら、四万十川へ漕ぎ出そう！
四国霊場めぐ り（お遍路さ ん体験）	延光寺	延光寺は行基が開基し、弘法大師が再興した真言宗の古刹で、四国霊場88ヶ所第39番札所です。境内には赤亀の石像があり、国の重要文化財に指定されています。そんな由緒あるお寺でお遍路さんの体験ができます。
川エビ捕り	西土佐村 観光協会	四万十川の漁法「エビ筒漁」。夜、川に仕掛けて朝引き上げるとたくさんの川エビが取れる。きれいな川の大切な水産資源。
カツオ加工工 場見学	佐賀町内	全国有数の「カツオ」の一本釣りの町で、港近くには加工工場があります。一本釣り漁をVTRなどで紹介し、カツオが加工される工程を見学することができます。
大敷網(定置 網)	窪津漁業 協同組合	漁師さんからの体験ができる定置網観光。漁の後は、とれたての魚を料理した刺身や地元自慢の炊き込み御飯などの浜料理も味わえます
ジンベエスイ ム体験	土佐清水市 企画広報室	世界最大の魚、ジンベエザメと一緒に泳ぐ事ができます。大きな体ですが、意外に性格はおとなしく、親しみやすい魚です。
マンボウスイ ム体験	土佐清水市 企画広報室	海のイケスに放している、マンボウ達と一緒に泳ぐことができます。体や、ヒレに触ったりもできます。
自然循環方式 水処理システ ム「四万十川 方式」	かわらっこ	四万十川方式は、水田の浄化機能を参考に、本来自然が持っている物質循環の自然浄化機能を活かした新しい水処理システムです。
磯遊び	大方町 観光協会	潮が引くと海岸の岩場にできるタイドプール。海水に生息するいろんな生物を観察しよう。
夜の生き物観 察会	(NPO)黒潮 実感セン ター	島がまるごと博物館(ミュージアム)の柏島で、人と海が共存できる「里海」づくりを目指して、島の環境を考えながら、海の生き物を通じて自然を学ぶ事ができます。

幡多広域観光推進連絡協議会ホームページより引用

3・2 熊本県水俣芦北地域

(1) 地域の概要

水俣芦北地域は、水俣市、田浦町、芦北町、津奈木町の1市3町で構成されており、熊本県の南端にあり鹿児島県出水市と接している。

リアス式海岸を西に望み、九州山地の起伏に富んだ山並みを東に頂くこの地域では、温暖な気候を利用した果樹、野菜、茶の栽培、豊かな海の幸、昔ながらの自然や温泉といった資源に恵まれている。

この地域は、水俣病という深刻な環境破壊によって、住民の健康が害され生命が奪われただけでなく、地域社会全体にも差別と偏見という大きなひずみを残した。それゆえ、地域の人々は水俣病の教訓を生かし過ちを繰り返さないよう、構成に語り継いでいる。また、21種類にも及ぶゴミの分別収集に代表される様々な環境保護への取り組みを進めている。

(2) 受け入れ組織の概要

受け入れ組織の概要

名称「(NPO)水俣教育旅行プランニング」(NPO法人)

会 員： 観光事業者、農漁業者、水産加工業者、市民など約20人

所在地： 熊本県水俣市桜井町1-1-1(肥薩おれんじ鉄道水俣駅内)

連絡先： TEL 0966-68-9450 FAX 0966-63-5909

e-mail: info@mkplan.org

http://www.mkplan.org/

発足年： 2000年任意団体発足

2001年NPO法人格取得

組織運営の財源

教育旅行のコーディネート代金、人材育成・情報発信等の委託事業、水俣駅の役務。

(3) おもな活動内容

【特定非営利活動の種類】

社会教育の推進、まちづくりの推進、環境の保全、人権の擁護、子どもの健全育成等

【特定非営利活動に係わる事業】

学習プログラムおよび教材の開発

教育研修旅行の企画誘致およびガイドの養成

地域振興策の企画立案及び調査

水俣病、環境問題、まちづくり、人権養護等についてのセ

ミナー開催，講師派遣
地域情報や環境問題等についての学習情報の発信

(4) 誘致活動等の経緯

組織発足の経緯

水俣市では，地域の環境への取り組みをテーマとし，観光誘致事業を進めてきた。

水俣市助役を長とし，地域の観光事業者，商業者等による委員会（のちに評議会）を設置し，パンフレットの発行など誘致活動を進めてきたが，その実践にあたる組織の必要性から NPO 法人設立に至った。

(NPO)水俣教育旅行プランニングの理事長は旅館経営者，副理事長は観光農園経営者，その他の理事は農漁業者，水産加工業者などが務める。当初の専従職員は3人，事業規模は1,500万円であった。

受け入れ実績

2003年度には30団体，2,838人を誘致した。

修学旅行の場合は，体験メニューごと一人あたり1,000～1,800円を徴収し，必要経費やインストラクターへの謝金をのぞいた500円前後をコーディネート料として受け取っている。

2002年に熊本県の地域事務所が費用を負担し環境学習のパンフレット「百聞より一見」を作成した。実際に子どもたちと接触するガイドの写真を多数掲載した点が評価され，学校や旅行代理店の反響が大きく，誘致数の増大につながったと思われる。

(5) 活動のキーポイント

地域の日常こそ体験の素材

体験プログラムのなかには，家庭ゴミの分別体験が入っている。水俣の家庭が21種類の分別をやっているのにちなんで，実際の家庭ゴミを子どもたちが21種類に分類する体験である。ゴミが金になると地元でも喜ばれている。観光農園が運営するレストランでの食事メニューの一つ。そこでは，昔から不要品となった家具，建材を使っていたが，それを「リユース」の学習と銘打った。これらのように，無理なつくりこみを行わずとも，地域の日常のいとなみに演出を加えることで立派な体験メニューとすることができる。

インストラクター

インストラクターの資質を上げていくことにも配慮が必要である。往々にして熱心な人ほど自分の思いを一方向的に伝えがちであるが、相手の関心、やる気を引き出すことが大事である。学習や研鑽の場を設けるとともに、時には面と向かい指摘することも必要となる。この点は行政でなく民間団体であるからできることである。

人材育成

人材育成の事業では、タクシーの運転手研修を実施している。計8回の講座で、修了後には車に「ガイドライバー」というステッカーを貼れる。2005年度は、旅館の仲居さん研修を予定している。インストラクターではないが、旅行者と接触する機会の多い人々が地域の魅力や水俣病の正しい情報を伝えることが重要である。

事前学習

修学旅行に来る学校に出向いて事前学習を行っている。事前学習を行っている方が、先生も生徒も反応がいい。また、プログラムの選択においても子供たちの自主性をいかすことができる。

(6) 今後の展望や課題

宿泊施設の押さえやマージン徴収が、旅行コーディネートの要となる部分であるので、旅行代理店業の資格取得も視野に入れている。

(7) 瀬戸内しまなみ海道周辺地域へのアドバイス

連携する市町村のエリアは狭すぎず、広すぎない方がいい。3市町村くらいの単位でコーディネーターを置く。事業を進めていくためには、30代のネットワーク（コーディネーター）を育てる必要がある。年間200万円～300万円位で雇う。3年で芽が出なければ辞めてもらう。1人年間10万円の投資をする人が20人～30人いれば雇える。民間でやる意識が必要。

図 3-2-1 水俣芦北地域のおもな体験メニュー

水俣病の語り部の話を聞く



家庭ゴミ 21 種類の分別体験



観光農園でリユースの物さがし



海岸にあるものでアートしよう



釜炒り茶づくり



間伐体験



(NPO)水俣教育旅行プランニングホームページより引用

表 3-2-1 おもな体験メニュー ～ 熊本県水俣芦北地域

体験メニュー	実施場所 連絡先	内 容
語り部の話し を聞こう	市立水俣病 資料館	水俣病資料館では、水俣病で被害を受けた「語り部」の人からお話を聞くことができます。病気や差別の苦しみ、それらと闘ってきた話は、困難に立ち向かっていく勇気や優しさにあふれたメッセージです。学校生活やこれからの生き方のヒントを学び取ってください。
水俣病の現場 を歩こう	エコパーク 周辺	「エコパーク水俣」は、水俣湾を埋めたてて水銀を封じ込めた土地です。周辺には水銀が流れ出た排水口や、湾を仕切っていた網の跡なども点在しています。また「水俣病資料館」「メモリアル」などの施設もつくられています。エコパークを巡りながら水俣病の歴史や、環境再生への取り組みについて学びます。
胎児性水俣病 患者と交流し よう	ほっとはう す	共同作業所「ほっとはうす」のメンバーと、しおりやコースターづくりをします。メンバーの多くは水俣病胎児性患者です。テーブルを囲んでいっしょに作業をしながら、水俣病や障害のことだけでなく、人と人との交流を楽しんでください。
水俣方式でゴミ を分別して みよう	環境クリー ンセンター	皆さんの町ではゴミはどのように分別していますか。水俣では市民が21種類に分別して出します。これは環境への影響を少なくしようとする市民の努力の現れです。水俣市民と同じ分別の体験をして、皆さんの生活にも役立ててください。
再利用の宝さ がし	福田農場	スペイン風に作られた観光農園を巡りながら、巧みにリユース（再利用）されている「モノ探し」をします。ここでは古電柱や鉄道の枕木、足踏みミシン台などがセンス良く利用されています。不知火海の眺めも最高です。
リサイクル 石けんを つくろう	せっけん工 場	石けんはどうやってできるか知っていますか？合成洗剤との違いは？せっけん作りや歯磨き実験を通して、生活の中で何気なく使っている洗剤が、環境や体に与える影響について学びます。環境に優しい生活をはじめましょう。
棚田を歩いて 水のめぐりを 学ぼう	久木野地区	一年中、豊富に湧き水が流れ出る寒川水源を訪ね、「日本棚田百景」に数えられる久木野の美しい棚田をのんびり歩きます。棚田の石積みや水路に見られる先人の知恵を紐解きながら、人間と水との関わりに想いを巡らしましょう。
水俣湾の 無人島を探検 しよう	恋路島	水俣湾に浮かぶ恋路島は、陸地からすぐそこにあるにもかかわらず、昔ながらの自然が残る島です。島に渡って海岸の生き物を「見たり」「触ったり」「食べたり」、鳥の声を「聞いたり」、島内の植物の「匂いをかいだり」、自然を五感で体験します。
海岸にある ものでアート しよう	明神海岸	波にもまれながら、小さく、丸くなっていくビーチグラス。海岸を歩きながら、ビーチグラスや貝殻を見つける姿は、まるで宝探しのよう！海辺で拾った物で、フォトスタンドやアクセサリを作ります。
ちくわを つくろう	木村蒲鉾店	水俣病が騒がれた頃、水俣で水産物を加工販売することは大変な苦勞でした。そんななかでも木村さんは地元産の物づくりにこだわって来ました。そんなお話を聞きながら、木村さんの指導でちくわづくりを体験します。焼き上がりをガブリと丸かじりしてください！
山に入って 間伐をしよう	久木野地区 の山林	植林された杉や檜は、切り出されるまでの何十年もの間、山を守る人たちの手によって育れます。山が荒れると景観だけでなく水源や二酸化炭素の問題に大きな影響が出てきます。間伐作業を通して、林業や環境問題について考えます。

(NPO)水俣教育旅行プランニングホームページより引用

3. 3 その他の事例

幡多地域，水俣芦北地域のほかにも，地域をあげて修学旅行や体験学習の誘致をめざしている事例を，多数見ることができる。ここでは長野県飯田市，和歌山県の事例を簡単に紹介する。

(1) 南信州観光公社（長野県飯田市ほか）

受け入れ組織

学校や旅行代理店と市内の観光施設，体験メニュー，宿泊施設等との仲立ちとなって，営業・商品開発・予約・精算・コンサルティングまで行う「南信州観光公社」が，2001年に設立されている。

資本金は2,045万円で，1市2町6村（飯田市・阿智村・喬木村・浪合村・平谷村・高森町・豊丘村・松川町・南信濃村）のほか，商工会議所，金融機関，観光事業者等が出資している。

名称「南信州観光公社」(公社)

所在地：長野県飯田市育良町1丁目2番地1
みなみ信州農業協同組合 りんごの里 内

連絡先：TEL 0265-28-1747 FAX 0265-28-1748

e-mail:m-sinsyu@mis.janis.or.jp

<http://www.minamin.ne.jp/kousha/index.html>

発足年：2001年1月

おもな体験メニュー

～南信州観光公社ホームページより抜粋～

「風越山・虚空蔵山登山」

アルプスの大パノラマに感動！ブナ林，林鳥，石仏を訪ねて。

「絶滅危惧種（レッドデータブック）の実体と保護を考察する」

ギフチョウ・ザゼンソウ・ハナノキ・サギソウなど。

「ビオトープの環境調査とビオトープづくり」

休耕田を利用し実際にビオトープをつくり，後に観察。再び調査に訪問する。

「巨木と語る」

伊那谷は南限・北限の多様な植生に恵まれている。里山の役割も学ぶ。

「中央構造線と伊那谷の地質」

中央構造線博物館見学，中央構造線安康露頭部観察，活断層
念通寺断層観察。

「大平宿保全活動」

清掃，修繕，薪割り，間伐，草刈り，障子張り。

「秋葉街道補修復元作業」

あなたの力で伊那谷と遠州を結ぶ古の街道を蘇らせよう。

「乗馬（日本トレッキング）」

馬場で基本練習後，野外へ外乗トレッキング。馬とのふれあ
いは，やさしさを学ぶ。初心者乗馬に最適な優しい気性の
中間種で安心して楽しめる。

（２）和歌山県「ほんまもん体験」

概 要

和歌山県では2002年より「ほんまもん体験」と銘打ち，体験型の観光
誘致キャンペーンを進めている。286のメニューを用意し，パンフレッ
ト，ホームページ等で情報発信を行っているほか，事前事後学習資料や
プロモーションCDの制作，語り部の養成講座など，特色ある取り組み
を進めている。

事務局機能は県観光交流課が持つ行政主導の形態であるが，紀南地方
の旅館組合に加盟する旅館・ホテル40軒が，前日・当日でも利用可能な
50メニューの予約申し込みの取り次ぎを始めるなど，地域内における連
携も進められている。

「ほんまもん体験」

連絡先： 和歌山県観光交流課・(社)和歌山観光連盟

和歌山市小松原通一丁目1番地

TEL . 073-441-2785・422-4631

FAX . 073-427-1523

e-mail : e0625001@pref.wakayama.lg.jp

<http://wiwi.co.jp/kanko/taiken/index.html>

おもな体験メニュー

～和歌山県観光交流課「ほんまもん体験」ホームページより抜粋～

「地曳網体験」

和歌浦湾の魚を収穫し，とれたての魚を賞味できます。子供
から大人まで楽しい思い出となる海の体験です。

「柿の作業体験」

地域特産の柿の収穫作業を通して、果樹農家のこだわりと技術に触れてください。

「間伐体験」

熊野では木材価格の低迷のため放置された山々がたくさんあります。間伐をしていただくことによって、地面に光を当て下草を生やし、水源涵養機能を増やし豊かな自然にして下さい。山の民の願いです。

「漆器蒔絵体験」

室町時代に起源を持つ「紀州漆器」の代表的技術「蒔絵」による絵付け体験。盆等に書かれた下絵に塗料を塗り、カラフルな金属粉を付着させてオリジナル漆器を製作します。

「かまど飯炊き体験」

昔なつかしいかまどを使って飯炊き、茶粥づくりを体験し、味の違いや香りのよさなどお米の味をみなおしてください。

「肝だめしと宮司の怖いお話」

本殿にて宮司のお話を聴き、宝物殿へ。徳川家人形や髪伸びる人形などの説明を聴きながら、物の大切さや思いやりの心を見つめなおしてください。

「熊野古道・歴史散策ウォーク」

平安時代から熊野詣での主要なルートとして栄え、町内各所には当時の休憩場所となった王子跡が点在し、熊野古道のシンボルである牛馬童子像や安珍清姫伝説で知られる清姫の墓などの名所があります。

「紀州備長炭・炭焼き体験」

紀州備長炭発見館では木炭の歴史と文化を学習でき、炭窯では実際に紀州備長炭および黒炭、竹炭を口吹きから出荷までを一工程を通して体験し、お持ち帰りいただきます。

4 . 体験学習推進のための課題

4 . 体験学習推進のための課題

「1 . 体験学習・修学旅行の現況等」「2 . 先進事例地域の調査」, およびワーキンググループ会議の意見を受けて, 瀬戸内しまなみ海道周辺地域において, 体験学習の実施や修学旅行の誘致を進める際の課題を, 体験メニュー・受け入れ体制・情報発信の三分野にわたり提案する。

4 . 1 体験メニューについて

(1) 看板となるメニューを明確に

先進事例である高知県幡多地域では, 「四万十川のカヌー」「ホエールウォッチング」「カツオのたたきづくり」を, 熊本県水俣芦北地域では, 水俣病と環境先進都市の取り組みの学習を看板メニューとして, 打ち出している。このような地域のイメージを形成する, これこそ「しまなみ海道」と思えるような分野・体験メニューが必要である。

(2) 地域の魅力を語り尽くす

水俣市における家庭ゴミの分別「体験」は, その地域の日常生活そのものを体験メニュー = 「商品化」したものである。このような視点でながめれば, 対象地域には数多くの「商品」候補が存在するものと思われる。

(3) 地域内の連携, 仲間さがしにはげむ

体験学習の担い手となっている団体, 個人には多大なエネルギーが必要であり, 事業の改良や拡大に躊躇する例も少なくない。しかし, 視点や呼びかける相手を変えると, 意外な助っ人や仲間が現れることもある。地域や近隣の諸団体への呼びかけを強化すべきである。

(4) 担い手は孤軍奮闘

瀬戸内しまなみ海道で結ばれた地域ではあるが, 必ずしも日常的なつながりがあるわけでもなく, 市町村や島を越えた交流や連携の場も少ない状況で, 体験メニューの担い手は孤軍奮闘の状況である。

また, 行政からの対応も様々であり, 効率的な支援措置が求められている。

4・2 受け入れ体制について

(1) 窓口機能が必要

体験学習や修学旅行に向かう側，受け入れる側，双方にとってワンストップサービスができる窓口（組織）が必要とされる。現在は，瀬戸内しまなみ海道周辺地域振興協議会，今治中央地域農業改良普及センターが，それに準じる役割を担っているが，職務やマンパワーの制約から，今まで以上の役割を期待することは難しい。民間側の力を活用するなど，新たな段階を築いていく必要がある。

(2) 地域内の連絡・調整体制が不十分

対象地域の体験メニューでは，専用の施設を構えて子どもたちを受け入れている例はまれで，大部分が日常の活動・仕事・家事の合間に受け入れをしている状況にある。修学旅行など多人数を分散して受け入れる，条件が合わない場合は他の団体やメニューを斡旋するなど，体験メニューを担っている団体間の連絡や調整も重要となる。

また，体験メニューの担い手相互だけでなく，域内の交通機関，飲食店，宿泊施設等との協力をとりもつ機能も必要である。

(3) 積極的な「営業」活動が必要

先進地域では三大都市圏の教育委員会や学校巡りをはじめ，修学旅行出発前の事前学習，事後学習，さらに旅行代理店や学校に出向いての感想，注文の把握など，きめ細かで積極的な「営業」活動を進めている。

対象地域の現状を考えれば，今すぐにこのような「営業」活動を始めるのは困難であるが，体験メニューの担い手や関係する行政職員に，そのような活動の必要性を周知することからはじめていくべきである。

(4) 民間の力を活用

これまでの瀬戸内しまなみ海道周辺地域振興協議会，しまなみ大学の活動には，民間団体が主体的に参画する場が多くはなかった。協議会や大学事務局の活動や運営に対して，地域内の民間団体が「協働」の立場で参画していく仕組みをつくっていくべきである。

4 . 3 情報発信について

(1) 情報発信が不統一

対象地域の体験学習や修学旅行誘致に関わる情報発信は、2001年3月に発行されたパンフレット「しまなみ体験メニュー」、および同じ内容のホームページに限られている。

しまなみグリーンツーリズムをはじめ、体験メニューを実施している市町村や団体のなかには、パンフレットやホームページ等で独自の情報発信を行っている例もあるが、対象地域をあげて体験学習誘致に取り組んでいることが掲載されていない。体験学習に関する情報の集約、統一した発信が求められる。

また、「しまなみ体験メニュー」に掲載されていないが、近年増えている民間団体の体験学習的な活動の情報収集にも力を入れる必要がある。

(2) 地域内にも周知を

この地域として、修学旅行や体験学習の誘致を行っているという事実が、対象地域の関係者に周知されていない。また、すでに修学旅行や体験学習を受け入れている実績が数多くあるのだが、その情報が地域で共有化されていない。

くわえて、体験メニューを実施している団体、関係者であっても、他の地域での体験メニューの有無、実践内容などを知るすべがなく、相互の連携や紹介などを行うことができない。

地域外への情報発信も重要であるが、同時に地域内の関係者へ必要とされる情報が伝わるよう努めるべきである。

(3) 情報発信に工夫を

地域の看板となるような体験メニューを中心にした情報の発信や、対象者や地域をしばった質の高い情報発信も求められる。

たとえば、地域内の尾道、今治両市、さらに広島、福山、松山の各都市圏など近隣の都市住民への、ターゲットをしばった情報発信などは、比較的口ーコストで効果的に実施できるものと思われる。

図 4-3-1 体験学習推進のための課題（ワーキンググループの意見等）

メニューづくり	<p>看板となるメニューを明確に</p> <ul style="list-style-type: none"> ○しまなみ海道体験観光の軸となるテーマは何なのか？ ○瀬波体験やグリーンツーリズムなど、看板となりうる商品を明確にして、地域全体でPRしたり、体験することが必要。 ○水俣の21種類の家庭ゴミ分別「体験」の話を知ると、特色ある体験メニューが必要なんだと感心した。 ○三橋のうち唯一自転車で渡れる点が特色なので、活用していきたい。 	<p>地域の魅力を語り尽くす</p> <ul style="list-style-type: none"> ○海上交通の魅力をアピールすべき（地道～船航路、お散歩クルーズ）。 ○島の暮らしの不便さ、橋が架かったことによる生活の変化、こんなことを語るメニュー。 ○「橋」に関して学ぶメニュー。 ○朝陽、夕陽、向かいの島のビューポイントをさがすこともメニューになる。 ○地引網や貝掘りなども、ご当地らしいメニューである。 ○海岸清掃などボランティア活動も、体験メニューになりうる。
	受け入れ体制づくり	<p>総合的な窓口機能が必要</p> <ul style="list-style-type: none"> ○地域外から訪れる人、地域内の関係団体双方にとっても一元的な窓口機能が必要。 ○しまなみ海道の振興協議会、農業改良普及センターとも、所管やマンパワー面での制約があり、総合的な窓口機能は抱えない。 ○市町村合併や広域行政の枠組の変更などで、しまなみグリーンツーリズムの事務局機能が変わっていくはず。 ○行政が窓口となると、県境や市町村界を越えてこまがらできない。
情報発信		<p>情報発信が不統一</p> <ul style="list-style-type: none"> ○地域をあげた体験学習誘致の取り組みが、情報発信されていない。 ○協議会発行の「しまなみ体験メニュー」には、グリーンツーリズムの情報が掲載されていない。 ○市町村が発行している印刷物には、しまなみ大学の情報がほとんどない。 ○便利で信頼されるホームページがほしい。 ○しまなみ海道のイベント情報の統一、整理を望む。

地域内の連携・仲間さがしにはげむ

- グリーンツーリズム活動に対して、地域の協力や理解が足りない。
- 地元の学校や子どもたちを対象にした取り組みも大切である。
- 地元の宿泊施設や観光施設等とタイアップしたメニューの開発が必要。
- 体験学習関係者どうしが、お互いに体験メニューを体験し合うことも、心がけなければならない。

担い手は孤单奮闘

- 情報提供や資金面で、各団体、メニューへの援助が求められる。
- 事故や食中毒など緊急事態が発生した際は、実施団体への負担がきわめて大きい。リスク分散できるような制度がほしい。
- 体験学習当事者の学習（スキルアップ）の機会づくり、研修旅行も必要である。

積極的な「営業」活動が必要

- 大都市圏の教育委員会や学校巡りなど、足で稼ぐ営業活動が重要である。
- 体験実施、修学旅行後に感想や評価を、出向いて聞くフォローアップが必要。その場では厳しい意見は出てこない。
- 修学旅行となれば担当教師は安全第一に流れがち。説得するためには、旅行代理店業者等に力を入れる。

民間の力を活用

- 統一「窓口」は各団体の事情が分かって、コミュニケーションができる人しかできない。
- しまなみ海道周辺地域は広すぎる、どうつないでいくのか。
- 形や組織づくりを持つのではなく、民間の力でつながるところから、つながっていくこと。

情報発信に工夫を

- 対象地域に応じた個別の情報発信も必要。
- DM発送などで体験客をリピーター、顧客にしている。
- 今の子どもたちの関心を引く表現が必要。
- グリーンツーリズムや体験学習の大切さを、親子にいかに関わるか。
- 個人参加、自主的な参加を促すようなメニューづくり、情報発信が必要。
- 子どもたち自身が選択できるように、情報発信の方法にかかわる。

5 . 体験学習推進のための方向性・施策

5 . 体験学習推進のための方向性・施策

「4 . 体験学習推進のための課題」を受けて、体験学習の実施や修学旅行の誘致を進めるうえでめざすべき方向性・施策を、体験メニュー・受け入れ体制・情報発信の三分野にわたり提案する。

5 . 1 体験学習推進のための方向性

(1) 体験メニューづくり

魅力ある体験メニュー開発

～しまなみ海道を代表する特色あるメニューづくり

対象地域の看板となる「海」、しまなみグリーンツーリズム等の実績がある「食(しまのくらし)」、しまなみ海道のセールスポイントである「レンタサイクル」を柱として、既存メニューの魅力づけ、新規メニューの開発を進める。

未活用資源の体験メニュー化

～島の生活、歴史等に根ざしたメニューづくり

しまなみ海道ならではの資源、施設を活用して、体験メニューを随時開発していく。また、島ならではの生活ぶり、風習等を見聞するような、住民との密接な交流が図られるメニューを開発する。

地域との連携

～各メニュー、団体と地域との協力関係づくり

地域内のバス、船舶、宿泊施設等が主体となった体験メニューの開発への支援、それらと体験メニュー実施団体との連携を図っていく。

担い手づくりと支援

～各メニュー、団体への資金、情報、技術的な支援

体験メニューや実施団体への費用面での手当て、地域内外の情報提供や共同の情報発信、指導者としてのノウハウ提供など支援方を構築する。

(2) 受け入れ体制づくり

受け入れ組織づくり

～ 修学旅行等を一元的に受け入れるための組織づくり

体験学習や修学旅行のための情報提供，手配・予約，連絡調整を行う組織づくりを，行政と民間団体との協働のもと進める。

対外窓口の一元化

～ 地域内の状況を把握し，対外的な交渉ができる機能の整備

受け入れ組織の機能として，外部からの要請，交渉，回答などを，とりまとめて行う機能を整備する。

地域内における調整

～ 地域内の連絡調整，役割分担等を果たす機能の整備

対象地域で体験メニューを実施する団体，施設間への連絡，利用者からの要望のとりつぎ，大人数を受け入れる際の調整や役割分担を行う機能を整備する。

体験メニューの研鑽

～ 各メニュー，団体への育成の機会，場の提供

体験メニューを実施する団体，施設，指導者等を対象として，助言，研鑽の機会や場を提供していく。

誘致活動の推進

～ 体験学習，修学旅行等の誘致に向けた諸活動の実施

体験学習，修学旅行等にしばった宣伝活動，営業活動，フォローアップなど，団体単独では実施できない対外的活動を実施する。

(3) 情報発信

域内情報の収集，管理

～ 体験学習を中心に旬な地域情報を常時収集

体験メニューの実施団体や施設を中心に，観光施設や行事等のタイムリーな地域情報を常時収集していく。

地域「外」への情報発信

～効果的な媒体を使い，地域の魅力や体験メニューをPR

収集した地域情報や体験学習等の受け入れ実績を，地域外の学校や子どもたちへ発信する仕組みづくり，効果的な印刷物やホームページ等の制作を行う。

地域「内」への情報発信

～地域住民向けの体験メニュー，修学旅行等の来訪状況をPR

収集した地域情報や体験学習等の受け入れ実績を，地域内の学校や子どもたち，体験メニューの実施団体や施設へ発信する仕組みづくり，効果的な印刷物やホームページ等の制作を行う。

きめ細やかな情報発信

～地域，対象者別の情報発信，リピーターや顧客獲得のための情報発信

対象地域内の市街地に位置する学校，広島，愛媛両県内の都市住民等に，ターゲットをしばったきめ細やかな情報発信を行う。

5・2 体験学習推進のための施策

(1) 体験メニューづくり

魅力ある体験メニュー開発

～しまなみ海道を代表する特色あるメニューづくり

a) 「海」のメニューづくり

この分野では「潮流体験」が独自性，実績ともに，対象地域の看板となる存在であるので，今後も対象地域の「主力商品」としてPRし，同時に他の体験メニュー実施団体等への周知を行う。

それに続くものとしてマリンスポーツ，漁業体験と食の組み合わせ，海辺での自然観察などをメニュー化していく。

図5-2-1 「海」のメニュー例
地引き網体験（今治市吉海町）



山波の洲の潮干狩り（尾道市）



b) 「食（しまのくらし）」のメニューづくり

「しまなみグリーンツーリズム」も「潮流体験」同様に，「主力商品」として地域内外へのPRに努める。この分野では，広島県側に同様の取り組みが広がるよう，関係団体にはたらきかけていく。

図 5-2-2 「食(しまのくらし)」のメニュー例
魚のさばき方体験(今治市吉海町)



いぎす豆腐づくり体験(今治市吉海町)



c) 「レンタサイクル」の付加価値づくり

本四三橋のうち唯一自転車(歩行でも)で渡れる点が,しまなみ海道の自慢の一つであり,レンタサイクルは修学旅行生にも利用されている。しかしながら,ただ橋を渡るだけでは単調であり,魅力づけのための演出が求められる。

来島海峡大橋であれば,エレベーターで下りることができる馬島への案内,橋梁工事のエピソードを橋上で語る「語り部」さがしなどを検討する。

未活用資源の体験メニュー化

～島の生活，歴史等に根ざしたメニューづくり

a)島の生活「語り部」の募集，育成

「しまなみグリーンツーリズム」の魅力は，調理体験や食事ばかりではなく，地域のご婦人方との顔をつきあわせた交流にもある。これと同様に，島独特の生活様式，昔の暮らしぶりや風習などを面白おかしく伝える「語り部」の募集や育成を進める。

図 5-2-3 井戸くみ体験
しまなみ大学関連のイベントで実施



b)博物館，美術館における体験メニューづくり

対象地域内には，圓鑄記念館，尾道市立美術館，平山郁夫美術館，耕三寺博物館，大三島美術館，村上水軍博物館，今治市立河野美術館，玉川近代美術館などの博物館，美術館が点在する。これらの施設における体験メニューの情報収集やメニュー開発をはたらきかける。

地域との連携

～各メニュー，団体と地域との協力関係づくり

a)バス，タクシー事業者との連携

マイクロバス，ジャンボタクシーを利用して，尾道や今治発着の「体験ツアー」を商品化するよう，地域内の交通事業者へはたらきかけを行う。

b) 定期船事業者との連携

修学旅行の移動の手段として定期船を利用するケースが見られた。離島や瀬戸内海地域に住んでいないかぎり、船に乗る経験は意外と少ないものであり、子どもたちに喜ばれたようである。海から島を案内できるボランティアガイドを配置する、修学旅行に合わせた割安感ある乗船料金の設定などを、関係者にはたらきかける。

c) 宿泊施設との連携

体験メニューの関係者のなかには、より一層の交流を求めて農家民宿の設置を研究している団体もある。そこまでの域に達していなくても、地域内の宿泊施設と連携できれば、夜間の体験学習や宿泊を伴う交流を進めることができる。

また、他地域では宿泊施設が主体となり、泊まり客向けの体験学習を開催したり、近隣で行われる体験メニューの紹介や予約を行う例がある。宿泊施設の利用向上のためにも、体験メニューとの連携を図るよう、受け入れ組織等からはたらきかけを進める。

d) 教育機関との連携

対象地域内には尾道市立大学、今治明德短期大学にくわえて、広島大学向島臨海実験場（尾道市向島町）、福山大学マリンバイオセンター（因島市）といった教育研究機関が位置する。これらの研究者、学生と連携した体験メニューの開発をはたらきかける。

担い手づくりと支援

～各メニュー、団体への資金、情報、技術的な支援

a) 体験メニュー、団体への資金面での支援

体験メニューを実施している民間団体からは、行政からの資金面での支援を求める声が少なくない。県や市町村とも財政難のおり、ただちに独自の支援策を設けることは困難であるので、生涯学習、農林漁業など他分野の助成金などの活用を研究する必要がある。

b) 体験学習の動向等の情報収集

体験学習や修学旅行の動向などについて情報収集し、地域内の

関係者に周知していく。

図 5-2-4 帆布グッズづくり体験
(尾道市 / 工房おのみち帆布)



c) 体験メニューの魅力向上

体験メニューの魅力を上げるための改善、指導者の資質向上や育成は、単独の団体ではできるものではない。受け入れ組織が企画して学習会、先進地の視察などを手がけていくべきである。

(2) 受け入れ体制づくり

受け入れ組織づくり

～ 修学旅行等を一元的に受け入れるための組織づくり

a) 受け入れ設立組織準備会（仮称）の発足

市町村合併、それに伴う広域行政の枠組みの見直しなどがあり、行政側では新しい組織づくりのための条件が整うのは、1～2年先になるものと思われる。

それまでは、自治体と体験学習に関わる団体等による準備会を設け、本事業の提案等を実現するための具体的な検討を進める。

b) 地域内の関係団体への呼びかけ

本事業では、体験メニューを実施する団体を中心としたワーキンググループ会議を設けて検討を進めたが、今後はさらに地域内の観光協会、および賛同する宿泊施設、飲食店、交通事業者などをふくめたメンバーで検討していく必要がある。

c) 地区別、分野別の受け入れ体制づくり

対象地域は広大で、体験学習として扱う分野も広範囲に及ぶ。

すべてを受け持つ組織づくり以前に , 一定の地区に対して責任を持つ地区別の組織 (個人) , またはある分野に関しては地区を越えてマネージメントできる組織 (個人) を , メンバーとして構成されるゆるやかなネットワークを , 最終的な「組織」像とすることも考えられる。

d) コーディネーターの募集

一元化した受け入れ組織が , どのような組織形態をとろうとも , 実務を担うコーディネーターに頼るべき部分は大きい。「公募」をふくめて能力重視で選考する必要がある。

対外窓口の一元化

~ 地域内の状況を把握し , 対外的な交渉ができる機能の整備

a) 問い合わせ窓口の整備

体験学習や修学旅行で地域を訪れる予定の相手に対して , ワンストップサービスを提供する。

b) 予約取り次ぎ窓口の整備

地域を訪れる団体 , 個人の利便性を図り , 空き情報の提供 , 予約実務の取り次ぎを行う。

地域内における調整

~ 地域内の連絡調整 , 役割分担等を果たす機能の整備

a) 連絡会議の開催

体験メニュー実施団体等による連絡会議を開催する。

b) 実施状況 , 予約状況等の把握

外部からの問い合わせ , 予約等に応えるため , 地域内の体験メニューの実施状況や予約状況などを常時把握できるよう , 連絡体制を整備する。

体験メニューの研鑽

~ 各メニュー , 団体への育成の機会 , 場の提供

a) 学習会の開催

各団体や指導者向けの学習会を定期的に企画 , 開催し , 体験メ

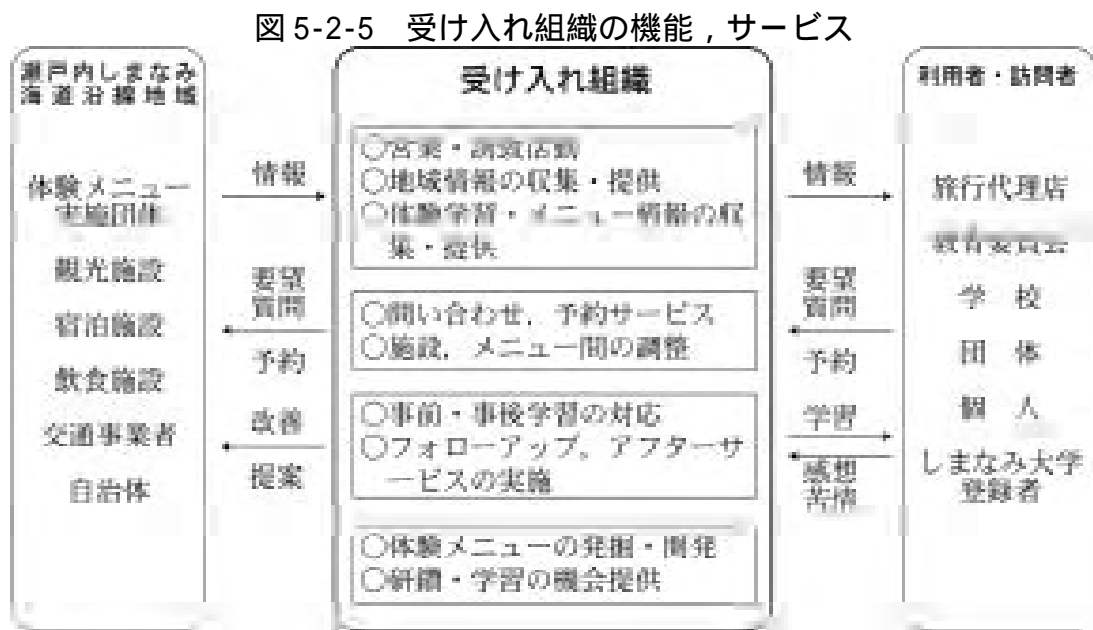
ニューや指導者の魅力アップに努める。

b)先進地視察会の開催

体験学習や修学旅行誘致を進める先進地へ訪問する視察会を企画，開催する。

c)地域内での合同体験会の開催

対象地域で体験メニューを実施している団体が集い，相互に情報交換，交流を図る場を提供する。



誘致活動の推進

～ 体験学習，修学旅行等の誘致に向けた諸活動の実施

a)教育委員会，学校への営業

広島県，愛媛県の東京・大阪事務所等を拠点として，教育委員会や体験学習を志向する学校等への営業活動を実施する。

b)事前・事後学習の実施

意欲的な学校は，修学旅行の事前学習，事後学習を求めている。このような要望にも対応できるようにしたい。

c)フォローアップの実施

旅行後に学校や旅行代理店に出向き，感想や要望を聞き，現場にフィードバックする。

(3) 情報発信

域内情報の収集，管理

～ 体験学習を中心に旬な地域情報を常時収集

a) 受け入れ組織による情報収集

効果的な情報発信のためには，まず的確に地域情報を収集することが求められる。体験メニューの実施団体や各地の関係者が，自発的に情報を寄せることに頼っていては実現は難しい。受け入れ組織の担当者が足繁く地域を回ることが基本である。

b) 特派員制度

受け入れ組織による情報収集を補完するため，住民ボランティアによる特派員制度を設ける。

地域「外」への情報発信

～ 効果的な媒体を使い，地域の魅力や体験メニューをPR

a) パンフレットの制作

「しまなみ体験メニュー」にかわる新たなパンフレットを制作する。体験メニューづくりの項目で述べたように，看板を明確にした編集とする。

b) ホームページの改訂

ホームページ上の情報も，パンフレットにあわせて改訂する。

c) しまなみ大学通信への掲載

しまなみ大学の学生（登録者）を対象にして，年2回「しまなみ大学通信」が発行されている。その誌面に体験学習コーナー（愛称：瀬戸内しまなみ大学付属小学校）を設けるか，もしくは独自のチラシを同封する。

d) 子ども向けの情報発信

子どもたちがホームページなどから情報収集して，修学旅行の

コースを選択する学校もある。新しいパンフレットを制作した後は、子ども向けのパンフレットやホームページを制作する。

e) C D , D V D の制作

「潮流体験」などは動きがあつてこそ、その迫力が伝わってくる。体験メニューの記録(動画)を集めたC D , D V D を制作する。

f) 出先事務所の活用

広島県、愛媛県が設置している東京・大阪事務所、東京での観光物産情報拠点である広島夢テラス、えひめ観光物産プラザ、尾道市の東京事務所なども、重要な情報発信拠点であり活用していく。

地域「内」への情報発信

～地域住民向けの体験メニュー、修学旅行等の来訪状況をP R

a) 自治体広報誌への掲載

両県や市町村が発行する広報誌に、体験メニューの情報や修学旅行の受け入れ情報などを掲載する。

b) 地域内メディアの活用

尾道市、今治市、あるいは福山市、松山市のケーブルテレビ局に情報提供する。コンテンツを一つ制作すれば、複数の局で使えるので経済的に情報発信できる。

c) 関係者への定期的な情報提供

実際に対象地域を訪れた修学旅行や体験メニューの実施状況などを、定期的にメールマガジンやF A X等で、体験メニューの実施団体、行政担当者などに情報提供する。

きめ細やかな情報発信

～地域、対象者別の情報発信、リピーターや顧客獲得のための情報発信

a) 近隣都市を対象とした情報発信

旧尾道市、旧今治市などの都市部、さらに広島、福山、松山等の近接する都市圏の住民を対象に、季節別のチラシ等を制作する。

b)顧客への情報発信

各体験メニューのリピーター ,まとまった人数で訪れた団体等を「顧客」として扱い ,メールマガジン等で情報提供していく。

6 . アクションプラン

6 . アクションプラン

体験学習や修学旅行の誘致に向けて、来年度以降早急に取り組むべき施策を提案する。

(1) 体験メニューづくり

「海」のメニューの検証

新しく発行されるパンフレットに、マリンスポーツ、漁業体験と食の組み合わせ、海辺での自然観察を掲載した。新たなメニューの重点的な情報発信、利用者の感想等の収集に努める。

「食（しまの暮らし）」のメニューの拡大

広島県側の婦人グループ等の情報収集、農業改良普及センター等との協議を行い、実施団体の拡大をめざす。

橋梁工事の「語り部」さがし

レンタサイクルの魅力向上のため、橋梁や西瀬戸自動車道についての「語り部」さがしに向けて、市町村や本州四国連絡橋公団に対して情報収集を行う。

博物館、美術館における体験メニューの発掘

すでに実施されている体験メニューの情報収集、学芸員など担当者との意見交換を行う。

教育機関と連携した体験メニューの発掘

地域内の高等教育機関が行っている地域向け体験講座の情報収集、関係者との意見交換を行う。

交通事業者との連携

交通事業者に対して、体験メニューの紹介、体験学習や修学旅行の実施状況等を紹介し、協力を要請する。

宿泊施設との連携

宿泊施設や業界団体に対して、体験メニューの紹介、体験学習や修学旅行の実施状況等を紹介し、協力を要請する。

(2) 受け入れ体制づくり

受け入れ設立組織準備会（仮称）の発足

準備会（仮称）を発足させ、受け入れ体制づくりに向けた具体的な検討を進める。

先進地視察会の開催

準備会（仮称）のメンバー等に呼びかけ、先進事例としてとりあげた高知県幡多地域、熊本県水俣芦北地域などへの視察を行う。

地域内での合同体験会の開催

来年度は、瀬戸内しまなみ海道の全通が予定されており、それを記念するイベントなども企画されている。準備会（仮称）として企画段階から参画し、合同体験会等を開催する。

(3) 情報発信

パンフレットの配布

新規パンフレットを積極的に配布する。

ホームページの改訂

ホームページ上の情報も、パンフレットにあわせて改訂する。

しまなみ大学通信への掲載

誌面に体験学習コーナーを設けるか、独自のチラシを同封する。

出先事務所の活用

広島県、愛媛県の東京・大阪事務所、広島夢テラス、えひめ観光物産プラザ、尾道市の東京事務所などを情報発信拠点として活用する。

自治体広報誌への掲載

両県や市町村が発行する広報誌に、体験メニューの情報や修学旅行の受け入れ情報などを掲載する。

地域内メディアの活用

尾道市，今治市，あるいは福山市，松山市のケーブルテレビ局に情報提供する。

関係者への定期的な情報提供

実際に対象地域を訪れた修学旅行や体験メニューの実施状況などを，定期的にメールマガジンやF A X等で，体験メニューの実施団体，行政担当者などに情報提供する。

近隣都市を対象とした情報発信

旧尾道市，旧今治市などの都市部，さらに広島，福山，松山等の近接する都市圏の住民を対象に，季節別のチラシ等を制作する。

瀬戸内体験学習フィールドづくり事業～事業のフロー

事業の背景～瀬戸内しまなみ海道周辺地域をとりまく状況

社会情勢	周辺地域の現況	周辺地域の動向
<ul style="list-style-type: none"> ○子育て環境を守り育む必要性の増大 ○体験学習、グリーンツーリズムへのニーズ増大 ○修学旅行の形態の多様化 	<ul style="list-style-type: none"> ○入り込み観光客数の減少 ○「瀬戸内しまなみ大学」の魅力向上が必要 ○愛媛県におけるグリーンツーリズムなど新たな潮流 ○NPOなどの民間活動団体の芽生え 	<ul style="list-style-type: none"> ○瀬戸内しまなみ海道の全線開通により内外の関心が集中 ○市町村合併の進展による行政サービスの変化

事業の目標

歴史、生活、海、山など恵まれた資源を生かして、体験学習など学びの場や機会をつくり、地域内の子どもたちの親土に対する知識と誇りを育む

修学旅行やグリーンツーリズム、家族旅行など地域外からの誘客による交流の拡大、入り込み観光客の拡大をめざす

体験学習・修学旅行等の現況

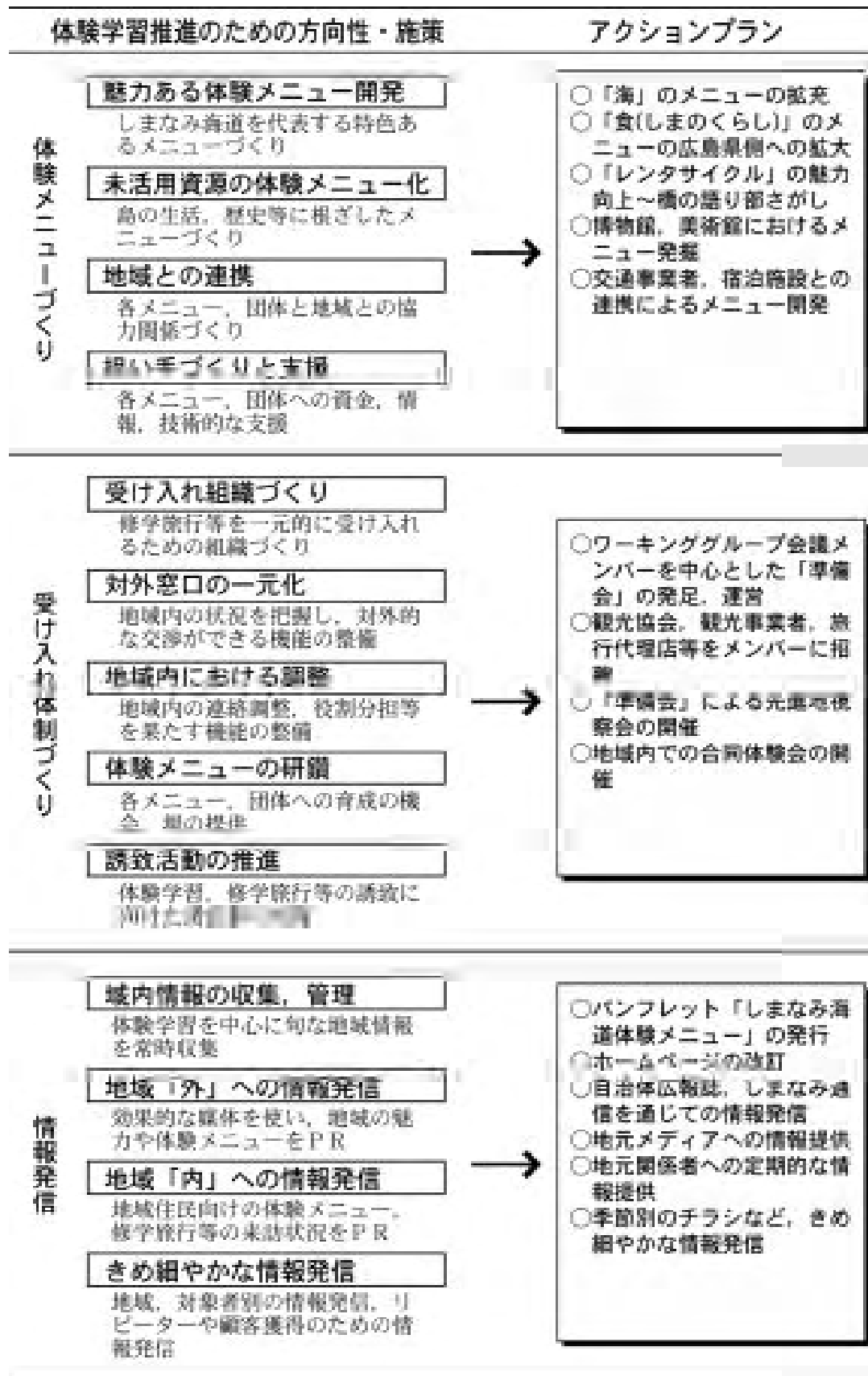
- 民間団体、個人による多様な体験学習を実施中
- しまなみグリーンツーリズム、滞在体験など、この地域ならではのメニューも存在
- 修学旅行の受け入れも数多い

先進事例地域の調査

- 体験学習や修学旅行に特化した受け入れ組織を設置
- 魅力ある体験メニューを開発、関係者へ支援
- きめ細やかな情報発信、営業活動を展開

体験学習推進のための課題

体験メニューについて	受け入れ体制について	情報発信について
<p>看板となるメニューを明確に地域のイメージを形成する、やっぱり「しまなみ海道」と思えるような看板が必要</p> <p>地域の魅力を語り尽くす 磨けば光る資源、メニューはまだある</p> <p>地域内の連携・仲間さがしにはげむ活動や受け入れに対する地域の協力や理解が必要</p> <p>担い手は孤軍奮闘 市町村を超えた交流や連携の機会が少ない、隣県の情報が少ない</p>	<p>窓口機能が必要 一元的な受け付け業務ができる窓口機能が必要</p> <p>地域内の連絡・調整体制が不十分 団体間の連絡や調整、域内の観光事業者等との協力をとりもつ組織がほしい</p> <p>積極的な「営業」活動が必要 顧客の管理、体験後のフォローアップなど営業活動が大切</p> <p>民間の力を活用 市町村合併や県の機構改革など、行政に頼ってばかりでは発展性がない</p>	<p>情報発信が不統一 「瀬戸内しまなみ海道」として統一した体験学習に関する情報収集・発信が必要</p> <p>地域内にも周知を 体験学習の内容や修学旅行誘致の実績が地域内にも知られていない</p> <p>情報発信に工夫を 「目玉」を明確にした出版物、相手に応じたきめ細やかで多様な情報発信が求められる</p>



7 . 資 料 編

7.資料編

瀬戸内体験学習フィールドづくり事業 「瀬戸内しまなみ大学付属小学校」拡大PTA会議

(1)趣旨

瀬戸内海地域は、豊かな自然、数々の歴史、文化資源を有しており、域内の子ども向けの総合学習、グリーンツーリズムや修学旅行のフィールドとして、大きな可能性を持っています。

こうしたなかで本事業は、瀬戸内しまなみ海道（西瀬戸自動車道）沿線をモデル地域として、体験学習の拡充や修学旅行誘致のための具体的施策を検討したものです。

(2)進め方～PTA会議

対象地域において体験学習や修学旅行の受け入れを進めている関係者によるワーキンググループを組織し、4回の会議を開催しました。

体験学習や修学旅行の場や機会を、当地域で運営されている「瀬戸内しまなみ大学」の子ども版をめざして「瀬戸内しまなみ大学付属小学校」と銘打ち、その運営を支える集いを『PTA会議』と称することにしました。

第1回PTA（ワーキンググループ）会議

日時：2004年11月26日(金) 開催地：今治市
実施されている体験学習の内容、修学旅行の実態等を把握。

第2回PTA（ワーキンググループ）会議

日時：2004年12月3日(金) 開催地：因島市
先進事例（熊本県水俣地域）の紹介、対象地域において反映すべき要素などを検討。

第3回PTA（ワーキンググループ）会議

日時：2004年12月20日(月) 開催地：宮窪町
先進事例（高知県幡多地域）の紹介、対象地域において反映すべき要素などを検討。

第4回PTA（ワーキンググループ）会議

日時：2005年1月28日(金) 開催地：尾道市
メニュー開発、情報発信、受け入れ体制等の分野において、具体的施策の検討。

報告会（拡大ワーキンググループ）会議

日時：2005年3月15日(火) 開催地：伯方町
会議の検討内容などを多くの関係者に報告。

瀬戸内体験学習フィールドづくり事業

「瀬戸内しまなみ大学付属小学校」拡大PTA会議

－ 名 簿 －

敬称略・順不同

大崎 義男	尾道市	(株)ピサンゼセッション 代表取締役
榊原 恒司	尾道市	(NPO)尾道文化財研究所 専務理事
高橋 逸爾	尾道市	シーカヤック教室インストラクター
森迫 賢治	尾道市	(NPO)尾道ベンチャー支援センター 専務理事
駄賀 恒男	因島市	いんのしま・まるごと自然観察会 主宰
幡地 玲子	因島市	元 因島親子劇場 事務局長
長澤 宏昭	瀬戸田町	(NPO)せとだ港房 理事長
野間 征子	今治市伯方町	有津婦人同志会
西本 優子	上島町岩城	岩城村生活研究グループ 代表
矢野 均	今治市宮窪町	(NPO)能島の里を発展させる会理事長
渡部 康男	今治市伯方町	今治中央地域農業改良普及センター しまなみ普及室 農村・担い手係長
山本 優子	今治市	今治 NPO サポートセンター 事務局長
越智 信枝	今治市玉川町	玉川町特産品開発研究会 会長
前田 靖	広島県地域振興部市町村分権総室	地域づくり推進室 企画員
原田 浩	岡山県企画振興部企画振興課	主任
黒田 晃郎	香川県政策部政策課	副主幹

－ オブザーバー－

岡田 清隆	愛媛県企画情報部企画調整課課長補佐
尾崎 幸朗	愛媛県企画情報部企画調整課係長
青野 公宜	愛媛県企画情報部企画調整課主任
赤尾 道子	愛媛県今治中央地域農業改良普及センター地域農業課長
平井 繁樹	愛媛県経済労働部観光推進局観光課しまなみ海道係長

－ 事務局－

森 聖二	今治市企画財政部企画調整課企画調整係長
越智 秀樹	今治市企画財政部企画調整課企画調整係主任
正岡 靖彦	今治市企画財政部企画調整課企画調整係主任
中原 一通	尾道市企画部企画課企画調整係主任

前田 眞	(有)邑都計画研究所
森本しげみ	(有)邑都計画研究所
相良 只夫	中国・地域づくり交流会 / (株)中国 地域づくりセンター

瀬戸内体験学習フィールドづくり事業・ワーキンググループ会議
瀬戸内しまなみ大学付属小学校 P T A 会議
 ~ 第 1 回会議報告 ~

しまなみ海道への体験学習，修学旅行
 誘致に向けて ~ P T A 会議!?始動

開催県挨拶

岡田清隆さん

愛媛県企画情報部企画調整課課長補佐

ご存じの通り，しまなみ海道は開通して5年，
 開通時の通行量，入込観光客数は落ち込んでい
 ます。

そして今，瀬戸内しまなみ海道周辺地域は，
 全線供用，本四公団の民営化，沿線市町村の合
 併など，転機を迎えています。

こうした時期に，平素より各地域で体験学習
 などの活動に携わる皆さんのお知恵を借りて，
 修学旅行やグリーンツーリズムの受け入れをめ
 ざした会議を持つことになりました。

これを契機に民間主導の新しい動きが起こり，
 周辺地域の活性化につながるよう期待していま
 す。

趣旨説明

事務局(相良只夫(中国・地域づくり交流会))
 より，ワーキンググループ会議の趣旨，進め方
 について説明しました。

ワーキンググループ会議の「目的」

歴史，生活，海，山など恵まれた資源を生か
 して，体験学習など学びの場や機会をつくり，
 地域内の子どもたちの郷土に対する知識と誇り
 を育むとともに，修学旅行やグリーンツーリ
 ズムなど地域外からの誘客による交流の拡大を
 めざします。

ワーキンググループ会議の「目標」

この地域では島々をフィールドとした学びの
 場「瀬戸内しまなみ大学」が運営されています。
 その趣旨に沿って，子どもたちを対象にした学
 びのネットワーク「瀬戸内しまなみ大学付属小
 学校」を，今日のメンバーで企画し，運営して
 いこうと考えています。

【この会議のめざすもの】

民間を主とした企画，運営
 地域内の子どもたち向けの講座づくり
 修学旅行等を迎える仕組みづくり

タイムテーブル

日時：2004年11月26日(金)13:30~16:30

場所：今治市役所第2別館特別会議室3号

内容：

13:30 開会
 挨拶 愛媛県企画情報部企画調整課
 13:35 ワーキンググループ会議の進め方
 13:45 自己紹介・活動状況紹介
 14:55 しまなみ海道周辺の修学旅行等
 15:05 休憩・移動
 15:15 グループ別討議
 16:10 全体とりまとめ
 16:30 挨拶 今治市企画財政部企画調整課
 閉会



ワーキンググループ会議の「検討事項」

次の分野，事項について検討を進めていきま
 す。

【メニュー開発】

今あるメニュー，講座の魅力向上，未活用資
 源の発掘，メニュー化，各メニューの連携

【情報発信】

パンフレット等の制作，HP，メールの活用，
 学校・教育団体との連携

【受け入れ組織】

関係者，担当者どうしの交流，各地域・各メ
 ニューの結びつけ，総合窓口サービス

ワーキンググループ会議の「進め方」

年内に4回の会議を開催します。このうち，
 第2回，3回の会議では，受け入れ組織をつく
 り積極的に修学旅行の誘致を進めている熊本県
 水俣地域，高知県幡多地域の関係者をお招きし，

取り組み方などを学びます。

そして来年3月には、より幅広い関係者に集まっただき、この会議の検討内容を紹介し議論を広める拡大ワーキンググループ会議を開催する予定です。

ワーキンググループ会議の「愛称」

この会議は「瀬戸内体験学習フィールドづくり事業・ワーキンググループ会議」という長く、堅苦しい正式名称を持っています。もっと分かりやすく、親しめる名称をとということで、この地域に住んでいる子どもたち、訪れる子どもたちを、学びの機会を通して見守る「瀬戸内しまなみ大学付属小学校PTA会議」と称することにしました。

メンバー自己紹介・活動状況紹介

渡部康男さん

今治中央地域農業改良普及センター



しまなみグリーンツーリズムは越智郡島しょ部9町村で展開中。25の生活研究グループや漁協婦人部で68通りの体験メニューを提供している。2001年より受け入れを開始した。昨年は6,182人を受け入れた。

2000年にグリーンツーリズム推進協議会を設立。しまなみ普及室を事務局として、各町村20万円ずつ、計180万円の予算で運営している。協議会では体験受け入れのほか、管内14カ所の直売施設の活性化も担当している。

旅行代理店などからは宿泊施設、移動手段の斡旋をという要望があるが、農業改良普及センターでは対応できない。一元的なサービス窓口を設けることが最大の課題である。

西本優子さん 岩城村生活研究グループ



グリーンツーリズムで昨年は178人の受け入れを行った。今年は9/15までに140人を受け入れている。

村内でも老人会での料理講習、地産地消運動や郷土料理の伝承に務めている。無理をせずに自分たちのできることをやっていくという姿勢で歩み続けてきた。れもん農家の研究会で、1泊2日で5名の子どもの受け入れた。このような体験型農家民宿を運営するのが夢である。

山本優子さん

(NPO)今治NPOサポートセンター



今治市および越智郡のNPO、市民団体を相手にした「相談業務」が、おもな役割。NPOは未来を創る組織だと考えている。しかし、そのNPOや活動に未来を担う子どもたちが参加する機会は意外に少ない。昨年「いまばり夢学校」を運営している。公募で集まった子どもたちに、NPOや市民団体が体験学習を実施するものだが、学習プログラムも一般公募し子どもたちの審査で採用を決める。プログラムを実施する側、受ける側双方が達成感を得られるよう、プログラムを洗練

することが大事であるが、その役割をセンターが担っている。

越智信枝さん 玉川町特産品開発研究会



町民や都会の人になつかしい味、本物の味を知ってもらおうと、閉校した小学校施設を拠点に、特産品の加工販売、小学校等への出前講座に取り組んでいる。飲食業の免許をとり、麺類や菓子の製造販売を行っている。玉川町には温泉もあるし、札所やダムもある。なんとか活性化できないかと、日々頑張っている。

長澤宏昭さん (NPO)せとだ港房



港を地域の活性化拠点にしようとする「みなとオアシス」に瀬戸田港が認証され、その受け皿としてNPOを発足させた。現在はフリーマーケットなどのイベントを実施しているが、いかに常設型とするか思案している最中である。マリンスポーツなど体験プログラムを計画しているメンバーもあり、この会議に参加することになった。一つの町、一つの島で客を呼ぶことは難しいので、地域内の「人」を結んで連携して

いくことが課題であろう。とは言うものの島で頑張っている人は多忙を極めており、誰がそれを引き受けるのか。

幡地玲子さん 元因島親子劇場



親子劇場で、因島やしまなみ地域に住む子どもたちを対象に、文化活動やレクリエーションの場を提供してきた。開通前には沿線20市町村で、各島の「トイマップ(布マップ)」をつくる活動で、因島の代表を務めた。今後も会議のメンバーとともに、しまなみ海道に住んだり訪れる子どもたちの育ちを見つめていきたい。

大崎義男さん(株)ピサンゼセッション



青年会議所や企画会社の事業として、尾道のまちづくりに関わってきた。尾道の景観にそぐわない高層マンションの建設予定地の買収運動を展開し、同地に「尾道白樺美術館」を開館することができた(1999年)。クラシック音楽を楽しむ「おのみちホットコンサート」、宗派の違う寺社を巡る「尾道七沸めぐり」などを仕掛け、運営している。

最近では、尾道で数多く行われているイベントの連携をめざした「おのみち ART コミュニケーション」事業をはじめている。

森迫賢治さん(NPO)尾道ベンチャー支援センター



尾道において、学者や企業家とともに、ベンチャー企業への支援や学生のインターシップを行うNPOを立ち上げた。学生や若者の感性を生かしたデザイン、アイデアの製品開発、企業に望まれる人材育成等に関わっている。学生による尾道も商店街の活性化プランの策定、イメージキャラクターづくりも行ってきた。しまなみ海道も対象にして、ベンチャー企業や活動を支援する「しまなみファンド」についても研究を進めている。今のしまなみについて思うことは、この海道は線状ではなく帯状につながっていること、もっと瀬戸内海の魅力を生かすべきだということ。

榊原恒司さん(NPO)尾道文化財研究所



研究所は2002年設立。歴史や文化財の紹介、イベントなどを通して、地元の人たちにもっと地域に誇りを持ってもらおうと

活動中。

子どもを対象とした事業としては、尾道石仏めぐり、遺跡の発掘体験などを実施している。

商店街の中にある旧尾道商工会議所の活用を検討しているが、これにも子どもたちを参加させている。

広島県側では県北部で「やまなみ大学」で、同じターゲットをねらっている。

松山市との文学を通じた連携、また石見銀山街道を軸とした島根県方面との連携も考えているが、これにも子どもたちの参加を考えたい。

グループ討議

二つのグループに分かれて、体験学習や修学旅行の誘致を想定した際の課題などについて検討しました。

利用者の拡大に向けて

域内学校の総合学習として、生徒や子どもへのアピール。

資格等による安心感の提供。

グリーンツーリズムの大切さを、親子にいかにか伝えるか。

自主的な参加の仕組み

個人参加、自主的な参加を増やす。

子どもたち自身が選択できるように。

身近な魅力の情報発信

その地域や島の特徴を生かした活動に

自分の島、隣の島の良いところを発見する活動を実施中

各団体への支援

情報提供、資金面での支援

体験学習当事者の学習、研修旅行も必要

地域でも支えてもらう

グリーンツーリズム活動に対して地域の理解が足りない

地元の宿泊施設とタイアップしたメニューの開発

総合的なサービス提供

一元的な窓口業務

利用者が集中する際の調整

限られた時期に集中する修学旅行、隣との融通がきくか

食中毒など緊急事態への対応

情報の一元化

しまなみ海道のイベント情報の統一、整理
 当該地域や活動団体への情報の周知
 しまなみ大学学生の拡大（とくに県外者）

情報発信の工夫

売り物を明確にした情報発信
 今の子どもたちの関心を引く表現

しまなみ地域内への情報発信

売り物を明確に、めりはりを効かせて（G
 Tパンフレット、体験メニュー集）
 安価な印刷物（季節ごとなど）で尾道市、
 今治市へ情報発信
 尾道市、今治市のPTA連合会へ情報提供
 旅行代理店と契約している交通事業者へ
 の情報提供

きめ細かな情報発信

対象地域に応じた情報発信（関東、関西、
 周辺県それぞれ）
 縁深い交流（関前村×東北福祉大学）
 体験客をリピーター、顧客に（DM発送な
 ど）

船の活用

海上交通の魅力アピール（尾道～鞆航路、
 お散歩クルーズ）
 船の中での体験学習

通行料金、船賃による抵抗感

途中で降りれば安くなるような通行料金
 制度を
 離島は乗船料が交流の妨げ

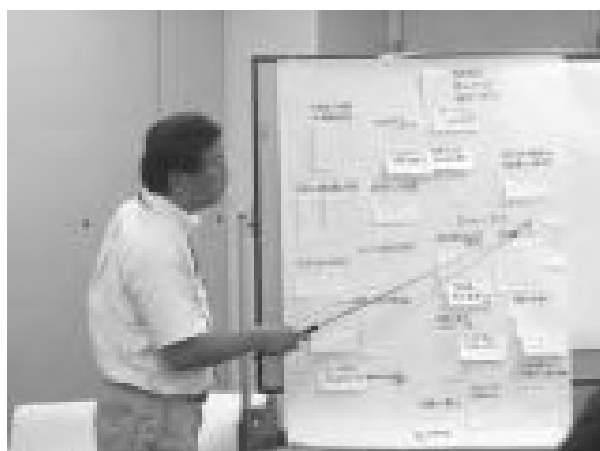
境を越えた連携

県境、市町村界を越えることができるのか
 役所間の温度差が大きい
 まだまだ官主導の取り組みである

今後の夢

滞在型ツーリズムの受け入れ
 海の里親制度

このような意見を足がかりに、誘致に向けた
 方策の検討を行っていきます。



瀬戸内体験学習フィールドづくり事業・ワーキンググループ会議
瀬戸内しまなみ大学付属小学校 P T A 会議
 ~ 第 2 回会議報告 ~

しまなみ海道への体験学習，修学旅行
 誘致に向けて ~ 先進事例の学習，課題や
 可能性の検討

歴史，生活，海，山など恵まれた資源を生かして，体験学習など学びの場や機会をつくり，地域内の子どものための郷土に対する知識と誇りを育むとともに，修学旅行やグリーンツーリズムなど地域外からの誘客をめざす「瀬戸内しまなみ大学付属小学校 P T A 会議」の 2 回目の集いが，因島市で開かれました。

自己紹介・活動状況紹介

まずは，今回からの参加になる 4 人のメンバーに，平素の活動状況などを紹介してもらいました。

村上利雄さん 能島の里を発展させる会
 (同会 矢野均さんの代理)



水軍レース，漁師市，潮流体験など，宮窪町内の様々なまちづくり活動を統合するための会。現在，NPO 法人を申請中。最近では，カレイ山の公園整備を進め，遠見「茶屋」を有限会社で運営しはじめている。

潮流美術館構想を打ち出し，村上水軍博物館，石文化運動公園，カレイ山を拠点にして，二泊三日の滞在ゾーンをめざしている。

タイムテーブル

和船のサミットの開催が夢。和船の良さを後世に伝えていきたい。

野間征子さん 有津婦人同志会
 同会は伯方町有津地区の生活改善グループ。現在 8 人で構成。

タイムテーブル

日時：2004 年 12 月 3 日(金)13:30~16:30
 場所：因島市民会館第 2 会議室
 内容：
 13:30 開会
 本日の内容紹介
 13:35 自己紹介・活動状況紹介
 13:55 学習会
 「先進地に学ぶ～熊本県水俣地域」
 (NPO)水俣教育旅行プランニング
 事務局長 吉永利夫さん
 15:10 グループ別討議
 16:10 全体とりまとめ
 16:30 閉会

たこめしなど地元の産物を利用した調理体験，食事提供などでグリーンツーリズムの受け入れをしている。農協支所において産直の朝市も開催している。8 人で今できることを無理なく実行していく。来週にも名古屋の中学生がやってきてタコ飯づくり等に挑戦する。



高橋逸爾さん

シカ・カヤック教室インストラクター
 アウトドアの遊び方を教える職業。キャンプイベントでアウトドア料理，シーカヤックで瀬戸内海をツーリングなど，自然の中で学ぶ活動をしている。しまなみ海道開通時には，多々羅しまなみ公園でシーカヤック教室を開いていた。1991 年には，総勢 24 艇のシーカヤックと

4隻のサポート船で瀬戸内海を渡った。倉橋島(広島県)を出て、愛媛県中島で一泊し、北条市に上陸し、松山市の道後温泉へ。坊ちゃん湯で格別の温泉気分を楽しんだ。



駄賀恒男さん

いのしま・まるごと自然観察会主宰
2001年3月より、因島を中心に月1回観察会を実施。現在まで通算44回を数える。

大阪で生き物の観察会に参加していた。生き物の歴史を学んでいく中で、人間が生きていくために人間以外の生き物に対して敵になってきたのでは・・・と認識するようになった。
自然を大切にしている活動によって日常生活の見直しにつながればと活動している。しまなみ海道については、海の生き物を中心に考えていきたい。



学習会
「先進地に学ぶ～熊本県水俣地域」
吉永利夫さん

(NPO)水俣教育旅行プランニング事務局長



法人組織

2001年にNPO法人を立ち上げた。会員23人、理事7人、監事2人。志があつて気持ちが伝わりやすい関係でないと活動しにくいので、無理して会員を増やそうとは思っていない。

理事長は旅館の経営者。その他の理事は、漁業、水産加工業、農業、地域コーディネーターなど。

職員は6人。内訳は8時～18時勤務2人。9時～17時勤務1人。商品開発2人、それと事務局長の自分。

業務について

修学旅行の体験学習の企画、コーディネート、ガイドを実施。

その前段として、水俣でいろいろな活動をしている人たちを集めて、修学旅行向けプログラムづくりを実施。

水俣での体験学習は、失った環境はなかなかもとに戻らないこと、生命を大切にすることなど、子供たちが帰ってからこのようなことを考えるようになってもらうことを目標としている。

環境学習事業を県から受託したことがきっかけとなっている。JTBの人たちと水俣を回ったところ、色々な物件が環境学習のネタになることが分かった。地域資源の再発見にもなった。

県が費用を負担して作成した環境学習のパンフレット(百聞より一見)が好評だった。実際に子どもたちと接触するガイドの写真を多数掲載した点が評価された。

体験メニュー

水俣病についての学習では、例えば法人の理事の竹輪屋さんが水俣で水産業をすることの苦勞を伝える。まだ偏見の残る現実や水俣病への理解をすすめる。

体験プログラムのなかには、家庭ゴミの分

別体験が入っている。水俣の家庭では21種類の分別をやっているが、実際の家庭ゴミを子どもたちが21に分類する体験である。ゴミが金になると地元でも喜ばれている。

観光農園が運営するレストランでの食事メニューの一つ。そこでは、昔から不要品となった家具、建材を使っていたが、それを「リユース」の学習と銘打った。



体験料金

たとえば、160人規模の1泊2日の修学旅行であれば、1人1,000円~1,800円徴収し、インストラクターに1万円支払い、材料費として受入先に300円支払う。NPOは手数料として500円もらっている。体験研修のインストラクターには謝礼として、1時間30分~2時間、20人位の受け入れで1万円支払っている。これは地域の事情で妥当だと考えている。

人材育成

ガイドへの教習も大事な点である。自分の思いを相手にぶつけるだけでは駄目で、相手の聞く気ややる気を引き出すことが必要。そのためには、関係者が研鑽していく仕組みがある。

人材育成の事業では、タクシーの運転手研修を実施している。計8回の講座で、修了後には車に「ガイドライパー」というステッカーを貼れる。来年度は、旅館の仲居さん研修を予定している。彼らのご当地の魅力や水俣病の正しい情報を、訪問者に伝えることがとても大事だから。

その他

旅行代理店には、水俣の地域全体で修学旅行の受け入れがなされているという印象を持ってもらっている。このことも売りの一つ。

修学旅行に来る学校に向いて事前学習を行っている。事前学習を行っている方が、

先生も生徒も反応がいい。また、プログラムの選択においても子供たちの自主性をいかすことができる。

8年後には高速道路(南九州西回り自動車道)ができる予定で、通過点になってしまわないかと懸念している。どれだけの人に下に降りてもらえるか準備ができていない。

宿泊施設の押さえやマージンが、旅行産業の要となる部分である。今後は旅行代理店もしようかと考えている。

しまなみ海道への提案

連携する市町村のエリアは狭すぎず、広すぎない方がいい。3市町村くらいの単位でコーディネーターを置く。

事業を進めていくためには、30代のネットワーク(コーディネーター)を育てる必要がある。年間200万円~300万円位で雇う。3年で芽が出なければ辞めてもらう。1人年間10万円の投資をする人が20人~30人いれば雇える。民間でやる意識が必要。

グループ会議

吉永さんの気迫に満ちた水俣談義の後、休憩をはさみ二つのグループで課題や展望について語り合いました。

会場ではそれらの意見を集約し、「気になる点」を集め、整理した「気になる(ミカンの)木」を紹介しました。



～ご報告～

しまなみグリーンツーリズム 伯方町有津の修学旅行受け入れを「見学」

会議のメンバーである野間征子さん（伯方町有津婦人同志会）、渡部康男さん（今治地域農業改良普及センターしまなみ普及室）が、修学旅行の受け入れをするということで、その「見学」に行ってきました。

子どもたちは名古屋から来た名古屋大学教育学部付属中学校の3年生32人、前日は大久野島（広島県竹原市）の国民休暇村に泊まり、10:30に会場であるJA越智今治有津支所に到着。さっそく調理体験に入りました。

子どもたちが挑戦したのはタコ飯、天ぷら、太刀魚のフライづくり。歓声をあげながら蛸のぬめりとりから調理まで進めていきました。

できあがったら、有津婦人同志会の皆さんが朝7時から用意した郷土料理と合わせて、ランチタイム。美味しそうに食べていました。

食後は、会の皆さんとの交流会です。子どもたちは「調理中に天ぷらを食べ過ぎて、おかずを残してしまった。」「生の魚や蛸にさわると経験がなかったので感激。」「この修学旅行の中で、一番印象に残るプログラム。」といった感想を述べていました。名古屋から同行されて来た添乗員も「過去の修学旅行のなかでも最大級のご馳走」と感動されていました。

この中学校のもう一つのグループは宮窪町に行き、みかん狩りを楽しんできました。その後、JR福山駅に向かい、新幹線で名古屋への帰路につきました。

野間さん、渡部さん、お疲れさまでした。そして見学に行っただけなのに、美味しい料理のお相伴にあずかり、ありがとうございました。



瀬戸内体験学習フィールドづくり事業・ワーキンググループ会議
瀬戸内しまなみ大学付属小学校PTA会議
～ 第3回会議報告～

しまなみ海道への体験学習，修学旅行
誘致に向けて ～ 先進事例の学習，受け入
れ方策の検討

歴史，生活，海，山など恵まれた資源を生か
して，体験学習など学びの場や機会をつくり，
地域内の子どもの郷土に対する知識と誇り
を育むとともに，修学旅行やグリーンツーリ
ズムなど地域外からの誘客をめざす「瀬戸内し
まなみ大学付属小学校PTA会議」の3回目の
集いが，開業したばかりの宮窪町村上水軍博物
館で開かれました。

これまでのふりかえり

第1，2回の会議では，修学旅行等の受け入
れ等に向けた「課題」の洗い出しを行ってきま
した。

各々の課題を「気になる木」として整理し，
今後の検討の方向性を明らかにしました。

「気になる木」～課題の柱

【メニューづくり】

そこにある資源を生かしたメニューづくり
新規分野のメニューづくり
各団体への協力，手助け
地元地域の理解，協力

【受け入れ体制づくり】

総合的な窓口業務
域内での連絡，調整業務



タイムテーブル

日時：2004年12月20日(月)13:30～16:30

場所：宮窪町村上水軍博物館

内容：

13:30 開会

本日の内容紹介

13:35 学習会

「先進地に学ぶ～高知県幡多地域」

(社)トンボと自然を考える会

事務局 森岡孝治さん

14:45 グループ別討議

メニューづくり

受け入れ体制づくり

情報発信

16:10 全体とりまとめ

16:30 閉会

学習会「先進地に学ぶ～高知県幡多地域」

(社)トンボと自然を考える会

事務局 森岡孝治さん



プロフィール

10年前に神戸から妻の実家である高知へ
移住。幡多広域観光推進連絡協議会の事務
局を経て現在，中村市トンボ自然公園に勤
務。修学旅行の誘致等の業務にも引き続き
携わる。

高知県幡多地域

幡多地域は高知県西南部の8市町村で構
成(中村市，宿毛市，土佐清水市，佐賀町，
大方町，大月町，西土佐村，三原村)。香
川県と同じ広さで，四万十川や足摺宇和
海国立公園など自然環境が豊かな地域。
中村市でも高知市から80km以上離れてお
り不便なところ。だからこそ自然が残って
いたと言える。



協議会について

幡多広域観光推進連絡協議会は各市町村と各観光協会で構成。業務は修学旅行を中心とした広域観光連携と窓口業務。それまでは、各市町村が単独で観光誘致をしていたが、学校が来ることになり、旅行会社からも希望があって、受け入れ窓口の一本化やメニューの一元化を行った。1994(平成6)年より組織の設立準備をし、1995(平成7)年に「高知西南修学旅行等誘致推進協議会」として発足。高知県観光振興課の補助金と幡多広域市町村圏事務組合の負担金、関係業者の協力金で運営。1998(平成10)年より「幡多広域観光推進連絡協議会」に名称変更し、補助金は高知県情報企画課に変わった。

体験メニュー

山、川、海の自然や農、漁業など地域資源を生かしたメニューによって修学旅行誘致をめざしている。

メニューの3本柱として、ホエールウォッチング(4,500円)・四万十川カヌー(4,000円)・かつおのたたきづくり(3,000円)。このメニューは、全学校が選択している。学校側としては、自然や文化のふれあいによる生徒たちの気づきのきっかけづくりとして感動を持って帰りたい。地元側としては、気楽に受け入れる、また来るね、といわせるための工夫をしている。

自然や地域文化など分野は幅広いが、人々との「ふれあい」は各メニューに共通したもの。メニューを持った人たちのネットワークによりさらに広がりつつある。現在では、かつおのたたきづくりがいちばん伸びている。体験場が港の中にあり、漁師が教えている。前向きな姿勢により、新しいメニューがプラスされている。

幡多地域の人気体験メニュー

上：ホエールウォッチング，中：カヌー教室，下：カツオのたたきづくり



運営の勘所

体験メニューを開発する際は、各市町村の商工会や観光協会に話しをもっていく。やる気があり声をかけてくれるところを探した。ないところは各市町村の観光課や林業課などに協力を呼びかけた。

行政をひっぱり上げる努力が必要。修学旅行の入村式では、町村長に挨拶してもらうようにしている。

地域全体で受け入れるという雰囲気づくりが大切。体験メニューを地元の子供たちに体験してもらう機会を設けている。

単品のメニューをどうつなぐか、コーディネート能力が重要。

東京のエージェントに会う時は、県の東京事務所の人と一緒にいき、東京事務所で資料等の案内ができるようにした。

パンフレットはまず学校へ送付している。メニューのビデオや写真、体験者の感想文も送付。現在はCD化(県のコンベンション協会が作成)して学校へ送っている。

学校へはDMを送っている。先生のネットワークや口コミによる効果をねらう。

今後の取り組み

旅行会社担当者の精算業務が煩雑になるため、予約や支払いを一ヶ所であることが望まれている。先進地である長野県飯田市では、「南信州観光公社」を設立し、体験メニュー、飲食、宿泊を一括管理している。多人数の学生の受け入れをどうするか。受け入れ体制を強化するためには、事務局の運転資金や人材もネックになる。事務局にも収入(マージン)が入るようにしなければ、運営できない。修学旅行は思い出づくり。短期的な損得ではビジネスにならないが、将来リピーターとして来てもらえる人を増やしていくことを目標としたい。

しまなみ海道への提案

メニューがたくさんある。今後、修学旅行の誘致するにあたって、内容や費用等の調整をするために横の連絡が必要になってくる。

学校は安く、より体験をしたい。この地域では橋の通行料がネックとなっているようだが、北海道や沖縄県などはバスチャーターへ補助金をだしているところもある。しまなみ海道と幡多地域、あるいは四国全域との連携も今後考えられるのでは？

グループ別討議

学習会の後、「メニューづくり」「受け入れ体制づくり」「情報発信」の3グループに分かれて、取り組むべきことを検討しました。

(1) メニューづくり

魅力ある体験メニューづくり
看板となりうるメニューが必要。海、食、レンタサイクルを柱としたい。
海で言えば潮流体験が一番。これに付随してマリンスポーツ、海岸の自然観察などを売り出す。
食はもちろん、しまなみグリーンツーリズム。
レンタサイクルについては、橋を渡る動機づけがほしい。地元の方に語り部となってもらい「橋」について説明してもらってはどうか。
未活用資源の体験メニュー化
櫓こぎ、製塩なども体験メニューになりうる。
魚釣りをPRしても良い。
湊町の歴史、海や島の風景もメニュー化していける。

海の汚染の実態を学ぶために、海岸の清掃ボランティアをやってもらったらどうか。因島鏡浦の大岩脈(中世代プレートテクトニクスの時代)の見学で、日本列島や瀬戸内海の誕生の仕組みを学習できる。

地域との連携

広島大学向島臨海実験場、福山大学マリンバイオセンター(因島)などの研究機関との連携は図れないだろうか。
お年寄りに頼んで、島の暮らしについて語ってもらうメニューも面白い。



(2) 受け入れ体制づくり

コーディネート組織づくり

構成員は体験メニュー関係者、宿泊施設、観光協会、市町村。
結果(成果)が出るまで2、3年はかかる。ただし、しまなみ海道はベースがあるのでやりやすい。
観光、グリーンツーリズムと入口は違うが、現地の人とふれあうことが大切なので、共通目標はつくれる。
既存組織の活用しかない? 今治地方観光協会では動きづらい、瀬戸内しまなみ海道観光推進協議会はあるが・・・。
一年かければ人間関係ができて、調整役となることができる。
運営の財源は? 幡多の場合は県、広域行政組合からの支援で支えられている。
生涯学習や農漁業、商工業分野の予算を持

ってくるできないか。
受け入れが高齢者の生きがいとなり、医療費の抑制につながる。そういう予防医学の名目で予算を確保できないか。
300万円出して愛媛県、広島県で一人ずつコーディネーターを雇う。
アウトドア分野では、尾道の高橋さんがコーディネータ役になれる。

対外窓口の一元化

しまなみ協議会は、外部との接点。
旅行代理店や学校と地域とのパイプ役となる。
旅行代理店の求めるものは、支払先の一本化、緊急時の連絡先、宿泊の手配など。
各体験メニューや地域の情報を組織に集中させることが大事。

地域内における調整

学校や代理店のニーズに合わせた行程づくり、料金の調整を行う。
組織からメニューづくりの働きかけを行う。

体験メニューの研鑽

人の育成は観光協会。ボランティアガイドをコーディネーター養成へ。
民泊に向けて自治会や区長、行政が取り組む。

誘致活動の推進

潮流体験は、町役場がPR、観光協会が受け入れ。モニター体験など県観光課と連携して活動している。
自主的な活動に向けて、ノウハウの取得が必要である。

(3) 情報発信

域内情報の収集、管理

コーディネーターによる非公式な情報ネットワークづくりを実施。



専門的な情報コーディネーターが必要。

地域「外」への情報発信

マスコミ、ホームページの活用。
ターゲットをしばり込み、CDやパンフレットを配布する。
愛媛県、広島県、尾道市の東京・大阪事務所を活用する。

地域「内」への情報発信

尾道、今治市（あるいは福山、松山市）のケーブルテレビ局に情報提供する。同じコンテンツでリレーして放映してもらう。
各自治体広報誌に掲載する。しまなみコーナーを常設。
タウン誌に掲載してもらう。

きめ細やかな情報発信

関係者の人脈を使い、ターゲットをしばった情報発信を行う。
潮流体験などはJRやJTBが発行する「時刻表」に掲載してもらえば、大きな反響を得られるだろう。
体験者の生の声を取材して情報発信していく。
柱となるメニューを絞って、それを育てていくことも大切。
体験者に対するアンケート調査をこまめに行い、情報発信のターゲットや方法をしぼる努力が必要。

噂の「潮流体験」「村上水軍博物館」見学

会議に先立ち、宮窪町の潮流体験、ならびに先月開業したばかりの村上水軍博物館を見学しました。

講師の森岡さんも「これはすごい」と大激賞。



瀬戸内体験学習フィールドづくり事業・ワーキンググループ会議
瀬戸内しまなみ大学付属小学校PTA会議
～第4回会議報告～

しまなみ海道への体験学習，修学旅行
誘致に向けて～アクションプランの検討

地域内の子どもたちの郷土に対する知識と誇りを育むとともに，修学旅行やグリーンツーリズムなど地域外からの誘客をめざす「瀬戸内しまなみ大学付属小学校PTA会議」の4回目の集いが，尾道市で開かれました。

これまでのふりかえり

昨年よりスタートしたこの会議では，現代の修学旅行等の動向把握，先進地である熊本県水俣地域，高知県幡多地域の取り組みに関する学習会，将来的な受け入れ方策の検討などを行ってきました。

とくに，参加者の皆さんの関心を集めてきた問題は，前述の二地域で活動しているような「しまなみ海道」における一元的な受け入れ組織を，どう築いていくかという点です。

広島県側，愛媛県側とも市町村合併が進み，広域行政の枠組みが転換しつつあり，また自治体財政が厳しいなか，行政主導で新たな組織づくりを進めることは難しい状況にあります。

こうした状況をふまえたうえで，短期的に無理なくできることは？将来的な展望を持ちながら今は始めるべきことは？一歩前をめざしたアクションプランを検討しました。

アクションプランの検討

～メニューづくり

このテーマでは，地域の目玉となる魅力あるメニューづくり，未活用の資源の売り出し方などを検討してきました。

とくに，宮窪町の潮流体験のような海を活かしたメニューづくりに話題が集まりました。

とくに，瀬戸田町の塩田跡に設けられた釣り堀で，釣り＋調理体験＋食べるというセットメニューを組む。因島の水軍レースで使う「小早」の体験。同じく因島東海岸の大岩脈の学習と磯辺の生物観察。というようなメニューの具体化を図ろうといった提案が出ていました。

この「海」と，しまなみグリーンツーリズムがめざしている「暮らし」，さらに「レンタサイクル」を体験メニューの柱として考えていきます。

タイムテーブル

日時：2005年1月28日(金)13:30～16:30

場所：尾道市公会堂別館4階40号

内容：

- 13:30 開会
本日の内容紹介
経過報告
- 13:50 グループ別討議
「付属小学校の運営-アクションプラン」
メニューづくり
受け入れ体制づくり
情報発信
- 15:30 休憩
- 15:40 報告会
- 16:10 次回拡大PTA会議について
- 16:30 閉会



～受け入れ体制づくり

来年度より正式な組織づくりをめざした「準備会」を発足させようという提案がなされました。

メンバーは，このワーキンググループから発

起人をまず選出。発起人で足りない分野は能力のある人を探していく。たとえば、宿泊施設関係者、観光協会(尾道市,今治市,上島町),NPO 団体,旅行代理店,地元の旅行業組合等など。

会の当面の目標(活動)は,愛媛県側はしまなみグリーンツーリズムを引き継ぎ発展させること。広島県側は体験メニューを増やしていくこと。

とくに,生口島道路,大島道路の開通=しまなみ海道の全通をにらんで,両県でイベントが予定されているようなので,この準備会として関わっていき,担い手となればといった具体的なプランも出てきました。

でいく,一方的な情報発信だけではなく質の高いイベントを開催していく,そのためにはプロデューサーが必要だ,というような提案がなされました。



~ 情報発信

このテーマでは,今年度内にパンフレットを制作することが決まっています。それについて検討を進めました。

子どもの関心をひく内容,何を訴えたいかメリハリをつける,海・食・レンタサイクルを柱とする,さまざまな角度で読める表現(例えば,地域別,テーマ(みかん別),イラストの掲載,実際に体験した子どもたちの感想を掲載するといった意見が出ていました。

また,パンフレット以外の話題では,「しまなみ通信」や自治体の広報誌に体験メニューや訪れている修学旅行の情報を掲載する,チラシ程度のボリュームで四季別のメニューを売り込ん

瀬戸内体験学習フィールドづくり事業・ワーキンググループ会議
瀬戸内しまなみ大学付属小学校 P T A 会議
 ~ 拡大ワーキンググループ会議 (報告会) ~

瀬戸内しまなみ海道周辺地域振興協議会では、子どもたちの体験学習や修学旅行の場や機会を提供する「瀬戸内しまなみ大学付属小学校」の運営を行っています。

とくに、今年度は国土交通省国土計画局の支援のもと、体験学習の当事者による P T A 会議(ワーキンググループ会議)を設け、メニューづくり、受け入れ体制づくり、情報発信等についての検討を進めてきました。

このたび、その内容を披露し、より広範な人々と検討する拡大 P T A 会議(報告会)を開催しました。

主催者挨拶 中山 厚
 国土交通省国土計画局特別調整課長



お忙しいなか、このように沢山の方に、ご参加いただきましたことを、まずは厚く御礼申し上げます。現在、施行されている第五次全国総合開発計画では、多様な主体による参加と連携による地域づくりというものを国土づくりの柱としております。このため、国土交通省では、都道府県の枠を越えた地域の自主的な連携の取り組みを支援するプログラムとして地域連携支援ソフト事業というものを実施しております。本年度、この瀬戸内体験学習フィールドづくり事業が地域連携の先駆的な取り組みとして、全国で3件あるうちのひとつとして採択されました。

さて、皆様お住まいになっておられる瀬戸内海地域、とくにこのしまなみ地域は、わが国有数の内海を有する特色ある地域です。海、山などの豊かな自然、それから特産品、貴重な歴史遺産など、豊富な資源に恵まれているところでございます。

先ほど私も潮流体験をしてきましたけれども、全国的にはあまり知られていませんけれども、これから活用が期待される資源も多数あるのではないかと推察されます。こうしたものを最大限に生かすことで、都市との地域間交流を活発にし、この地域ひいては瀬戸内海全体を活性化することができるのではないかと考えています。

ここにお集まりの皆様方には地域を少しでも良くしたいという思いにかられての方々だと思いますが、個々の活動では限界もございまして、つながりというものにも発展しないと思っております。こうした中、今年度、愛媛県、広島県、岡山県、香川県の行政、それから NPO の関係者、グリー

日時：平成 17 年 3 月 15 日(火) 13:00~15:30
 場所：今治市伯方公民館
 主催：国土交通省国土計画局
 共催：愛媛県、広島県、岡山県、香川県、
 瀬戸内しまなみ海道周辺地域振興協議会

タイムテーブル

(参加者 116 人)

- 13:00 開 会
 主催者挨拶
 国土交通省国土計画局特別調整課長
 中山 厚
- 13:10 経過報告「瀬戸内しまなみ大学付属小学校」
 相良只夫 中国・地域づくり交流会
- 13:30 取り組み紹介
 「しまなみグリーンツーリズム」
 野間征子さん 有津婦人同志会
 「しまなみの資源に学ぶ」
 榊原恒司さん (NPO)尾道文化財研究所
- 14:10 休 憩
- 14:20 検討会(パネルディスカッション)
 「瀬戸内しまなみ海道～体験学習のすすめ」
 榊原恒司さん 前出
 村上利雄さん
 (NPO)能島の里を発展させる会
 渡部康男さん
 今治中央地域農業改良普及センター
 前田 眞さん
 (NPO)えひめ NPO センター理事
- 15:30 閉 会

ンツーリズム活動をしておられる方々、生活改善グループの方々など多様な方々にお集まりいただき、今まで4回にわたりワーキンググループの会を開催し、地域資源を活用した体験学習のメニューづくり、窓口の一元化等による受け入れ体制整備、効果的な情報発信について活発な議論をいただいたところでございます。

本日はこうした議論の成果等について、ご発表いただくということになっておりますけれども、検討で得られた方策をこの地域において実践していただき、しまなみ地域はもとより、瀬戸内海全体での体験学習フィールドづくりにつながることを願っております。また、他の地域の模範になり、全国にこういった動きが広がるということが更に希望するところでございます。

会場にお集まりの皆様にも置かれても、自らのこととして積極的な参加をいただき、忌憚のないご意見を述べていただきますことで本日の会が実りの多いものになりたいと考えておりますので、どうぞよろしく申し上げます。



経過報告「瀬戸内しまなみ大学附属小学校」
相良只夫 中国・地域づくり交流会



今回の取り組みには、実際にこの地で体験学習やさまざまな地域づくり活動を進めてらっしゃるみなさん方を集めたワーキンググループ会議を設け、計4回の会議を持ち、その地域の課

題、あるいは進んでいく方向性を検討してきました。その中では、積極的に修学旅行や体験学習の誘致をすでに進めている熊本県の水尻芦北地域、高知県の幡多地域の方々を招いての学習会も開催しました。また、ここ伯方町の有津のほうに押しかけまして、実際に来られている修学旅行の見学会なども開催しました。

この地域の子供達、それから外の子供達にしまなみの魅力に触れさせる場と機会を提供する。それがこの会議の目標です。具体的には、体験メニュー、受け入れ体制、情報発信という3つの柱に分けて議論を検討を進めてきました。

その方向性ですが、メニューづくりについては、魅力あるしまなみを象徴するようなメニューを発見していこう、開発していこう。実際には潮流体験のような素晴らしいメニューがありますが、地域をあげて売り出すという態勢にはなっていない。それから、未活用資源の体験メニュー化。しまなみでもまだまだメニューとなるものがあると思います。

具体的に何から取り組むかという点ですが、しまなみ海道の体験学習の3本柱を「海」、それから、グリーンツーリズムを中心とした「食・暮らし」、それから「レンタサイクル」。この3つを柱として、体験メニューを今後も充実させていこうということになりました。

次に、受け入れ体制づくりですが、一元的な組織が必要だということは誰もが望むことです。しかし、現在のこういう財政状況、それから市町村合併の大きなうねりのなかで、新規に組織を立ち上げるというのは、簡単な話ではありません。そこで、ワーキンググループのメンバーを中心にして、準備会なるものを発足させていこうというように提案されています。

この会では、来年度のしまなみ海道全線開通にちなんだイベントの企画・運営へ主体的に参加することなどが提案されました。

そして情報発信ですが、今年度中に新しいパンフレットを制作することになっています。そして、自治体の広報誌や協議会が発行する「しまなみ通信」などに、修学旅行の受け入れの様子、PTA会議がめざしていることなどを、情報発信していきたいと考えています。

一方で、大きなビジョンを見据えつつ、もう一方で民間サイド、個人レベル、団体レベルでできるような取り組みを積み重ねていき、しまなみならではの体験学習のフィールドづくりを進めていきたいと願っています。

取り組み紹介「しまなみグリーンツーリズム」
野間征子さん 有津婦人同志会



私達が娘の気分で実施している有津っ子たちのグリーンツーリズムについて紹介します。

活動の原点は1995年に、イギリス、ドイツへ食アメニティの研修とホームステイに行ったことです。その時体験したベット&ブレイクファースト(B & B)、ベットと朝食を準備するだけだったら、日本型で自分らで出来るんだと思って飛びついたのです。

それから、東京での4日間の研修に行きました。講習を受けてもすぐ実践できたわけではありません。試行錯誤の連続でした。

そんななか、2000年度から農業改良普及センター伯方支所が音頭をとり、管内の生活研究グループから一つずつ体験メニューを考え実施するようになります。そして、2001年度には管内で100に及ぶ体験メニューが開発されました。私達は五目寿司、いぎす豆腐、タコ飯、鯛めしづくりを体験メニューとして掲げました。

その年に東京都立の深川第四中学校が修学旅行に訪れました。テンヤワンヤで大変だったんですが、帰った子どもたちから温かい感想や御礼の手紙が届き、続けてやっていこうという気になりました。

体験でつかう食材は、すべて事項調達です。それで、タコやイギスは旦那さんがみんな船で採ってきてくれます。野菜も家で作っているものです。実施する場所も、10人までなら私の家です。農協の集会所を借りると3,000円かかりますので、みなさんの日当が払えなくなってしまうので。収入ばないとやはり、しんどさがぐっと増すので、そこらへんが難しいところです。

先日は、修学旅行を連れて来られた先生が、今度は家族を連れてこられました。やはり、リピーターが増えるということは、ここが良かったんだなということでまた来年も来てくれるのを楽しみにしております。

それから、地域に活動の和を広げる。私等の

グループも病気で休んだり、足腰が悪くなったといった問題が出ています。地域の中でお手伝いの出来る人を増やしていきたいと考えています。

私の夢としては体験学習だけではなく、ファームインにも手を伸ばしたいと考えています。人が宿泊できるような体制を作りたいと思っております。まだグリーンツーリズムは、修学旅行生がまた来年もおいでできるように予約はしていますが、一度に40人、50人とは受け入れませんので、島全体が受け入れるような仕組みを作っていきたいと思っております。

そして、地域の活性化にも役立ち、また地産地消につなげるようにと考えています。そういう活動を、これから何年続けられるやら分からないけど、頑張りたいと思います。

取り組み紹介「しまなみの資源に学ぶ」

榎原恒司さん (NPO)尾道文化財研究所



私は尾道市で文化財を扱う仕事に就いています。

観光という言葉は、光を観ることです。光というのは、地域の誇り、宝物を観るということです。観るというのは、どういう意味かと言えば、ただ観るというのではなくて、見えない心を観ようということです。ということは、観光の対象はモノだけではなく、体験的な学習やいろんなことを、心の目で観ていくというのが観光だろうと思います。今から体験学習が、非常に重要になると思います。

しかし、自分のまちの宝物というのは分からない場合があります。尾道といえば、文化財が非常に多いんですね。猫も多いんですけども。お年よりも非常に多いですね。その中で、例えば石造物があった。毎日、見ていると別に気にも留めない。でもある時から、えらい観光客が急に来るようになった。持ち主はその石造物のことを何も知らないんです。

地域が面白ければ、人が来るんです。人が人を呼んでくるんですね。これが非常に重要なことですよね、これが今からの観光じゃないかと考えます。

子供達の修学旅行をいかに誘致するか、この地域の子供達が元気であることが一番必要なことですよね。大人の方ももちろん、元気でなければいけないですが。しまなみ海道で、何があるのかと言えば、自然があり、山があり、海があり、山というか島ですよ。それから、文化、先ほどありましたように歴史がありますよね、それから、先ほど出ました、環境の問題を今から取り上げることだと思います。そして、一番重要なのは、人間の温かさだと思うんですよ。この地域のみなさん、温かいですね。

この前は親子連れを相手に藻塩づくりの体験会を行いました。嘗めた時に甘くて皆さん感動されていました。子供のおむすびを結びたい。県外から来た子で、非常に珍しいと大喜びされた体験が、山波のあさり堀りでした。山波というのは松永湾にあって、大潮の干潮時に海上に出てくる浅瀬です。そこで貝掘りができるのですが、目の前を船が通っていくなかで、やうものですからみんな感動していました。そして翌日、ホテルで味噌汁を出してあげたら非常に喜びますよね。そして、貝殻でアクセサリーを作って、それをお土産にさせました。縄文料理体験をやったこともあります。縄文時代は肉とか魚ばかりじゃないんですね。それが主体じゃないですから。トチ、栗、どんぐりの実をつかって調理体験、試食をさせました。

先ほどグリーンツーリズムでも言われましたが、体験というのは、不思議に心に残っていきます。みなさま方の今後の活躍をお祈りしたいと思います。



検討会（パネルディスカッション）

「瀬戸内しまなみ海道～体験学習のすすめ」 パネリスト

榊原恒司さん (NPO)尾道文化財研究所

村上利雄さん (NPO)能島の里を発展させる会
渡部康男さん

今治中央地域農業改良普及センター
コーディネーター

前田 眞さん (NPO)えひめ NPO センター



【前田さん】

松山に住んでいる人々に、しまなみ海道に行ったことある？と聞くと、「行ってみた 橋は見えてきた。」という話で終わってしまいます。

昨年、南予地域で町並み博覧会が開催され、随分お客さんが増えたというように聞いています。しまなみ海道でも、体験メニューの数の多さも含めて、飛躍する可能性はあると思っています。

【村上さん】

能島の里を発展させる会は、現在NPO法人格の取得を申請中です。

この会の前身は、1988年に誕生した水軍ふるさと会です。一村一品運動からイベント、町ごと博物館といった活動を進めてきました。そのなかで、水軍レースという愛媛県でも有数の海のイベントを生み出しています。

若い漁師が中心となり月に一回の漁師市をはじめました。そのときに、イベントとして潮流体験を始めたんです。これには、潮の流れが速いので海が浄化されて綺麗、潮の流れが速いので魚がしまっているというPRと、能島の歴史を知ってもらうという二つの目的がありました。船の方は漁師市のメンバー（漁師）、ガイドはふるさと会のメンバー等がやっています。

1999年には、しまなみ海道開通記念イベントがあって、千人あまりの方に乘っていただき非常に喜ばれました。その翌年には県の助成金がついて、本格的に潮流体験をはじめた訳です。



それまでは、漁師市の日に月一回だったんですが、土、日、祝日、4月から10月まで本格的にはじめました。同時にアンケート調査も実施し、改善を積み重ねてきました。その効果もあり、年間三千人あまりに体験してもらっています。

また、念願の水軍博物館が今年の10月にオープンしました。そのことで、潮流体験に対して様々な要望が出ています。毎日運行してほしいというのが第一ですが、そのためには専用の船が必要です。もう少し定員の多い船、そして専属の船頭とガイドが必要です。資金や知恵必要なんです。それで、支援団体となるNPO法人を設立することになりました。

【渡部さん】

農業改良普及センターは、農業関係の技術的な指導等に携わるのが本来の仕事です。グリーンツーリズムがたまたまこの地域で、県下のモデルとして進んでいたということで、旧町村の皆様と一緒に、事務局的な機能を受け持っています。

しまなみグリーンツーリズムというのは、合併前の吉海町、宮窪町、伯方町、大三島町、上浦町、弓削町、岩城村、生名村、魚島村、合わせて9町村での、体験学習受け入れの取り組みです。2000年度に県のグリーンツーリズム地域連携モデル事業として、旧町村の町村長さんを構成員とする協議会ができ、取り組みがはじまりました。

2000年度は学習会などを行い、2001年度より受け入れがはじまりました。スタート時には生活研究グループの皆さんによる32のメニューでしたが、一般農家の方、あるいは漁家の方により、潮流体験、地引網などが追加され、2002年度からは100のメニューで活動を展開しました。2004年度には3年間経った時点での見直しを行い、68メニューに集約しました。

受け入れ実績は2001年度には500人だったのですが、'02年度には5,500人くらい、それから'03年度には6,000人を超えました。それか

ら、今年度2004年度はまだ途中集計なんですけど、7,000人を超えております。

将来的には一万人、二万人という風な形で、受け入れればなと思います。それから、体験の内容なんですけど、大きく分けて、ふるさとの味体験が24メニュー、農業、漁業の収穫体験が31メニュー、暮らしの技体験が9メニューです。

暮らしの技体験は、花の生産農家にフラワーアレンジを教えてもらう、海岸に流れてきた海藻を押し花として、名刺や葉書を作る。

そして、潮流体験など島遊び体験の4つを加えて68メニューで活動しています。

【榊原さん】

尾道というのは全国的にも有名な観光のまちです。ここ伯方島の方も最低1回は尾道にいられたことがあると思います。じゃあ、逆に尾道の方が伯方島にいられることがあるかということ、よほどのことがない限り機会はないでしょう。

尾道文化財研究所では「萬迷所案内所」という無料観光案内所を運営しており、日平均200人以上に情報提供しています。今後は利用者にしまなみ海道の情報を大々的に提供していこうと思っています。

ただし、お宝が足りないんです。それが今後の大きな課題だろうと思います。例えば、しまなみ全体としての大きな祭りがあるとか、リレー方式で花火大会が開かれるとか。

当研究所では文化財新聞というのを発行しています。この新聞もどんどん広げて、しまなみ海道沿線地域全体を網羅しようというように企画をしています。しまなみと言えば、村上水軍は避けて通れない歴史なんですね。そこで例えば、中世の城めぐりとか企画してはどうでしょうか。中高年の歩け歩け運動が結構盛んですよね。

もうひとつは、尾道でも子供神楽に取り組んでいるんですが、伝統文化の子どもたちへの継承です。

【前田さん】

現場での苦労話、課題を教えてください。

【渡部さん】

たとえば、修学旅行であれば二百人を三十人単位に分けて、午前と午後で組み合わせさせてくれるというような要望が来ます。メニューは68ありますが、季節もののメニューもありますので、春に体験できない。あるいは、秋の修学旅行には体験できない。そんな物もあります。子供たちの希望を考慮したうえで調整を図るのは、なかなか大変です。

県、広島県、岡山県、香川県、瀬戸内しまなみ海道沿



将来的にはモデルコースをあらかじめ設定して、その中から選んでいただく形式がとれば、グリーンツーリズムの受け入れについても効率化が図れますし、それ以外の体験メニューとの連携も図れるのではと考えています。

【榊原さん】

これからは、官主導から民主導へと移っていく。尾道を世界遺産へと運動をしている。キーワードは、「子供」、「観光」、「体験」です。この運動を支えているのが事務局機能で、これが非常に重要である。子供会組織を動かす、若者の意見を聞く、取り入れる等。

参加している人達の共通のものを探していきながら運動を続けていく必要がある。主体を忘れないボランティアリーダーが必要であり、今の時代は女性がポイントである。パワーがすごい。強い、怖い、存在です。そういう人達が集まり、自分たちが楽しむことができる場を用意することが大事です。

【村上さん】

潮流体験は1億円産業であると思う。船や人材が足りない。和船サミットをしようとしたが、船大工がないということに気がついた。それを支える仕組みが地域にない。それでは和船づくりを興そうということになって工房ができた。このような関係が地域のなかでつくられ、潮流体験や和船工房のように目に見える形で現れてくる。これがエコミュージアムであると思う。そして、これらの活動が社会的に位置づけられることが重要である。たとえば、今治市の海事都市構想の中に位置づけられるとか。

【前田さん】

個々の体験メニューに関わっていらっしゃる方々は、なかなか他との連携というところまで頭が回りません。しかし、それらをつなげていく役割というのもしっかりいるんだろうと思います。

高工文通商印士計直尚 共創：愛媛県、広島県、岡山



そういう人達が、自分達がやっていることや想いを伝えたいと考え、結び付けていくためのアイデアが実際に見えてくると、それが組織の元になる。そして、具体的なものになっていくんだろうなと思います。

そういう連携組織づくりを急いではいけないのですが、それに向けて動くきっかけとして、何があれば良いのでしょうか。

【榊原さん】

まず、言い出しっぺがリーダーになるべきでしょうね。例えば、中学校や高校を思い出していただければ、集まった集団というのはひとつの群れです。賛同した群れが集まっていけば、自動的にグループができて、今度はよその学校のつながりができてくるのと同じですよ。

【村上さん】

カレイ山展望公園に小民家を移築して、茶屋、喫茶店をしたい。そこへ、無農薬でつくった古い時代の野菜。シーフードカレー、そしてヤギの乳が飲める場所を提供したいんです。

運営はグループで一円有限会社を立ち上げる。この一年間で60万円貯めております。というのは、5年で300万は大丈夫ですから、有限会社の可能性は十分あるわけです。

私たちの夢であるNPO法人と有限会社を絡ますことで、ベンチャービジネスが生まれてくるというようなことを夢見ています。

【渡部さん】

グリーンツーリズムの取り組みについて、今後は体験学習だけではなく、地域内の資源や様々な方々と連携して、取り組めていけたらなと思います。

そのためにはPRをさせていただかなくてはいいけない。尾道の方々に伯方島のこと、あるいは、グリーンツーリズム活動を知られてないというのは、大変ショックだったのですが、今度は是非PRをさせていただき、活動を展開し

ていきたいなと思います。

なお、今後は食農の問題、地元の小中学校へのPR、そういったところを将来に渡って検証していかなければいけないと考えてます。地域外へばかりではなく、内から攻めていく部分も必要ではないかと思います。

【前田さん】

自分達のやっていることの思いが共有できる、その思いの連携がスタートだろうと感じました。そういう意味では、自分達のやっていることをきちんと伝えていく仕組み、そういう場所をきちんと作っていくということが、すごく大事です。そういう個人の思い、よく「情熱」、「パッション」といいますが、その情熱が団体のミッション、目的に変わっていくはずですが、そのためにはなんらかの場所、意見を交換する場所が必要でしょう。



国土交通省地域連携支援ソフト事業
 (瀬戸内体験学習フィールドづくり事業)

「瀬戸内しまなみ大学付属小学校」 拡大PTA会議(報告会)



瀬戸内しまなみ海道周辺地域振興協議会では、子どもたちの体験学習や修学旅行の場や機会を提供する「瀬戸内しまなみ大学付属小学校」の運営を行っています。とくに、今年度は国土交通省国土計画局の支援のもと、体験学習の当事者によるPTA会議(ワーキンググループ会議)を設け、メニューづくり、受け入れ体制づくり、情報発信等についての検討を進めてきました。

このたび、その内容を披露し、より広範な人々と検討する拡大PTA会議(報告会)を開催することとなりました。

皆さんお問い合わせのうえ、ご参加下さい。

日時：平成17年3月15日(火)

13:00~15:30

場所：今治市柏方公民館

今治市柏方町木浦甲1234

今治市柏方支所(旧柏方町役場)隣

TEL.0897-72-1500

内容：経過報告

取り組み紹介(柏方町、尾道市など)

検討会「瀬戸内しまなみ海道

～体験学習のすすめ」

入場無料

問い合わせ先：

今治市企業財政部企業調整課企画係

TEL.0898-36-1503/FAX.0898-32-5211

主催：国土交通省国土計画局

共催：愛媛県、広島県、岡山県、香川県、瀬戸内しまなみ海道周辺地域振興協議会

